

日本圖書新報（第九二〇一九二十四號）別冊（昭和十五年三月五日）

佐々木政吉先生を語る

東京市麹町區三番町六番地
醫學博士
小池重

解説：

「佐々木政吉先生を語る」は、日本医事新報(910号-914号)に、佐々木政吉没後一年に当たる昭和15年(1940)に掲載された。作者の小池重(1874-1959)は、栃木県出身、獨協中学校で佐々木隆興と同期生。東京帝国大学医学部を卒業後、耳鼻咽喉科入局、獨逸フライブルグ大学に留学、帰国後、杏雲堂平塚病院副院長を務めた。佐々木政吉没後、その関係者に書面で回顧談を依頼し、それらを纏めたのがこの記事である。佐々木政吉(1855-1939)が、明治、大正、昭和と存命中繋がりを持った人物の中、この記事には25人の追憶談が記載されている。以下に、記載順に簡単な履歴と共に紹介する。

小金井良精(1859-1944、獨逸留学中同宿、東京帝国大学教授、解剖学者、人類学者)

佐藤三吉(1857-1943、東京帝国大学医科大学長、外科医)

三浦謹之助(1864-1950、東京帝国大学教授・第一内科学講座で佐々木政吉後任、同愛病院院長、内科学)

芳賀榮次郎(1864-1953、陸軍軍医総監、外科学)

鈴木主計(開業医、内科学)

金杉英五郎(1865-1942、東京慈恵会医科大学初代学長、耳鼻咽喉科創設者)

荒木寅三郎(1866-1942、京都帝大總長、學習院院長、医化学)

井上善次郎(1862-1941、千葉大学教授、内科学)

川名博夫(1864-1947、館山病院院長、千葉県初代医師会長、内科学)

高田畠安(1861-1945、サナトリウム南湖院院長、内科学)

平井毓太郎(1865-1945、京都帝国大学教授、小児科学)

和辻春次(京都帝国大学教授、耳鼻咽喉科学)

宮入慶之助(1865-1946、九州帝国大学教授、寄生虫病学)

原田熊雄(1888-1946、男爵、貴族院議員、日本銀行職員)

高木友枝(1858-1943、台湾総督府研究所長、伝染病学)

橋本節斎(?-1940、東京帝国大学助教授、ポンペ弟子、内科学)

川島慶治(青山内科、陸軍軍医少将、内科学)

下瀬謙太郎(陸軍軍医少将、陸軍軍医学校長)

志賀潔(1871-1957、慶應義塾大学医学部教授、朝鮮総督府医院長、京城医学専門学校校長、京城帝国大学總長などを歴任、赤痢菌発見者)

佐藤達次郎(1868-1959、順天堂医院院長、順天堂大学学長)

林春雄(1874-1952、東京帝国大学薬理学教授、国立公衆衛生院院長、薬理学会会長)

岩渕裳川(漢詩人、漢詩師匠)

伊沢多喜男(1869-1949、台湾総督、東京市長、貴族院議員)

山谷徳治郎(1866-1940、医師、政治家)

佐々木秀一(尊和病院院長、杏雲堂病院副院長、内科学)

佐々木政吉先生を語る

醫學博士 小池重

東京・麹町・三番町六

佐々木政吉先生を語るものとして私はあまりにも弱冠で、先生の医徳を表現するに適當のものでない。私が先生を恩師として仰ぎ、先生の膝下に参じ、先生に親炙し始めたのは、先生が已に五十歳（日清二十年）の時である。さすがに或る意味に於て、先生が最早少しく老境に入ら、これまでの経験とともに、私は先生が青年壯年の頃となりし時代を知るものがである。

先生は大正十二年九月の土曜夜を契機として、香雲堂の職を退かれた、時に先生六十九歳であつた。西原先生は優遊自適の境地に陥生を送され、極端生活に入られた。向來私は先生に接觸する機会がますます減少し、自分で諒する勝ちとなるに至つた。

昭和十年の春、一日私は大森山王邸に先生を訪問し、從来になく、シングリと半時間計り、先生の背話をしを拝聴した折、私から進んで數項の質問を發し、其時間く所の事柄を私は手記しておいた。先生が此の如く語られた事は曾てなき事ある。

小金井良精博士の追憶

博士は明治十三年卒業で、先生よりは一年の後輩といふ事になる。私は曾て先生から「小金井君は達者である」といふ。

るかな」と話題になりしことを記憶せしために、それを追憶して今回博士に向つて、先生との友好關係を開ひ合せたのである。然るに博士の回答に曰く、

老朽起憶も甚だ駄文なくも左にて三を試に記さん。

一、始めて君の知遇を得たるは、明治十五、六年頃、君は既に東校に在學、小生は五年入學、君に一等聽科生、小生は二等聽科生なり。比頃君に級中、ことごとお嬢に見えた。先生は自ら筆をとりて、手紙をかゝること、は毎年一月元旦唯た一度、東洋先生に差し上げる年賀状のみであつたといふことを曾て仄聞した。

先生の五十歳以前に於ける消息を揃寫するため、其の材料を得て、欲し、私は方角の諸先生へ書面を發した。

しかし先生と同時代の人物は多く、已に貴重の客となり、先生の同窓二十名中、唯先生のほか最後の一人であられた程である。偶々私たが此人を送され、極端生活に入られた。向來私は先生に接觸する機会がますますふるに「昔の事にて記憶せぬ」といふものが妙くなかった。

唯だ一つ珍らしき材料として從來未聞の消息は、先生の舊知の一人なる小金井良精博士よりの通信である。

二杯以て君は滿足して居られた。この酒店特種のものであつて酒度は極めて上好、但し樽に腰をかけて飲む所。

四、君は誠に純正なる人であつて、少しほねがまりがなかつた。中々議論好きで時々隨分説いて聞はしたこともあるが、結果が如何にあらうとも何時も笑つてお手舞になつた。

佐々木先生が小金井先生、留學中に同宿し、同遊し、かくまで御親交ありしことを、私は先生から来た會話がなかつたが、當時の様子が懐め居られた。東洋先生の得意點か！ と申し合つた。

二、國外留學中、明治十五、六年頃、ストラスブルグに大澤謙二、秋亮四郎、平等と四人同宿、其主婦アーディングルガーデンに一種異國の人であつて、大學の先生方に多く知られ、誤に無駄題目の人にて、ストラスブルグを留申は實に餘饗なる時期であつた。大學生の修業の方は、臨床科を主として、スマカル Krasnowski 同時に病理をレッカリンガハゼン A. Reichenberg にてて先生はアーディングルガーデンに在學、パンベルゲル Hamburger に就かれたと聞いた。次にストラスブルグに終りにベルリンに居られ、フレーリック Friele ライデン Leyden などに親された。

三、君は酒を少量ではあつたが嗜むことは、特に互になつかしきものなることは、吾れも人も同じもの、昔も今も同じにて人情には變らなしだ。

先生も老境に入りてから時折、小金井先生の外に「佐藤三吉君は近頃どうか」など、私に尋ねられたことがあつた。其の故、私は先生と佐藤先生との交友關係を試みに今回開ひ合せた。

佐藤先生は本年八十四歳と思ふが大學は明治十五年の卒業である。而して其回答によれば十六、七年頃伯林にて互に面識したのが最初である。

佐々木君は一見性温良、慾を追う。態度泰然、自ら人をして信服せしむるの風あらき。小生に皆の人格に深く信服した一人にござりき。

と佐藤先生は申し越された。

八十歳以上の舊友としては、小金井、佐藤の兩先生以外、他に佐々木先生の青年時代を知れる者もない。語る者もない。石黒子爵は今尚ほ存命なれど、數十年病床の人であるから、九十一歳以後は絶えて筆も執られず、而會もなきれぬから、今更往事を尋ねべき山もない。

先生の經歷

先生は安政二年十一月、東京本所區原川通花町中川茂吉氏の末子として生れた。中川家は徳川時代に於ける有名な鉤道具屋であった。先生の母は佐々木震洋翁の妹でヒサと云つた。有名なる東洋先生の震洋翁の長男であるから、東洋先生と改名先生とは從兄弟である。

先生は幼にして極めて頗る早熟で、震洋翁に愛され、養はれて遂に東洋先生の養子となつた。時に東洋先生は二十歳で、東洋先生にして大學東洋に入り、初め英語を學んだ。當時英語の教師は沼間守一氏であつた。後も獨逸語を學び、三宅秀氏にマーベルを學習した。外國教師のうち、シンク氏、ヒルゲンブルフ氏などいふ獨逸人が居り、司馬凌波氏が其通譯をした。外國語に於ても日本語と同じく、

句讀を切つて讀むこと二注意せよと屢々

司馬氏から教えられ、「辨識がなきなたをとりて」を例に引かれたことを記憶すと先生は語られた。

先生は明治十二年、大學を卒業せられ二十五歳であつた。翌年二十六歳、獨逸へ留学せられた。初め文部省より先生を官費にて留學せしめんとの意を東洋先生へ通じ來つた。

東洋先生は尋常人でないから考へられた。官費となれば歸朝後、大學に對して義務を負ふこととなり、自由を束縛されるべく通じて來つた。

それに現在の自分として皆の留學費

に窮するものでもないから、私費となし、

其代りに改名先生を官費とする費用を以て更に尙ほ一名官費留學せしむれば如何

の爲めとなるべく如何にと、東洋先生は提案せられ、其義直に容はれて其選に入りたるもの、が同級の梅浦之英なりしこ

いふ。而して當時東洋先生との交渉に當りたるは石黒忠氏なりと聞いた。こ

の話は北村又倫翁(東洋先生、妹婿)によ

り私が直接聞知すべし處ある。且つ當時

東洋先生に働き盛りの四十一歳で、東

京衛生監修官(即ち医師)として東洋先生

の泰斗ウッセルヒュウ教授の下に日本人と

しては三浦守治氏、外れには佐藤三吉氏

が留學してゐたと先生は語られた。

エーリックス氏に就かれた。當時病理學

の泰斗ウッセルヒュウ教授の下に日本人と

しては三浦守治氏、外れには佐藤三吉氏

が留學してゐたと先生は語られた。

先生は以上の如く獨逸兩國の諸大學に

留學せらること、五ヶ年の久しうに涉

じて、其費用は總て東洋先生の私費より出た。セヨ居候から後年、先生の養嗣子たる降岸博士(東洋先生の甥)の獨逸留學に當つても亦五ヶ年間といふ長期遊學になつたものと仄聞した。

先生は明治十八年獨逸より歸朝せられ

直に東京帝國大學醫科大學教授となり、内科を擔當せられた。

三浦謹之助博士の追憶

今は名譽教授で同愛病院々長なる

其當時でもチアスは獨逸にては稀なる病

氣であつた爲め大いに興味を以て觀察せられたとの事である。其後先生はウキ

ンへ轉學することになつた。

當時ウキーンには、内科で有名なるバ

ムペルグル氏があり、先生は同教授につきて研究せられた。また咽喉科の大家に

つきてタルズースなどられた。先生が當に肺結核患者の喉頭を自ら診察せられたのも、此時の素養ありしに出ると思ふ。

それより先生はストラブルグ大學に轉じ、内科学をクスマウル教授に、病理學をレツクリングハウゼン教授に學ばれた。

更に尙ほ一名官費留學せしむれば如何

の爲めとなるべく如何にと、東洋先生は

提案せられ、其義直に容はれて其選に入りたるもの、が同級の梅浦之英なりしこ

いふ。而して當時東洋先生との交渉に當りたるは石黒忠氏なりと聞いた。こ

の話は北村又倫翁(東洋先生、妹婿)によ

り私が直接聞知すべし處ある。且つ當時

東洋先生に働き盛りの四十一歳で、東

京衛生監修官(即ち医師)として東洋先生

の泰斗ウッセルヒュウ教授の下に日本人と

しては三浦守治氏、外れには佐藤三吉氏

が留學してゐたと先生は語られた。

エーリックス氏に就かれた。當時病理學

の泰斗ウッセルヒュウ教授の下に日本人と

しては三浦守治氏、外れには佐藤三吉氏

が留學してゐたと先生は語られた。

先生は以上の如く獨逸兩國の諸大學に

留學せらること、五ヶ年の久しうに涉

じて、其費用は總て東洋先生の私費より出た。セヨ居候から後年、先生の養嗣子たる降岸博士(東洋先生の甥)の獨逸留學に當つても亦五ヶ年間といふ長期遊學になつたものと仄聞した。

先生は明治十八年獨逸より歸朝せられ

直に東京帝國大學醫科大學教授となり、内科を擔當せられた。

四、佐々木東洋先生の逝去(大正七年十月十一日)せられし時は、菩提寺が千住なりしたため、先生は駿河葉の宅から徒步にて行列の先導をなされ、御輿

の様に見受けられた。これ其頃まで

は、先生歩行を好まれざりし爲めなり

云々。

芳賀榮次郎博士の追憶

三浦先生と同窓なる陸軍医官中將醫學博士芳賀榮次郎氏が昔大軍醫として仙臺師範に勤務の頃、武谷水城軍醫監の紹介によつて、大學生なりし自分は初めて博士に面識したことがある。爾來翁に敬意を表し來れるより、今回敢て一書を呈したるに、直に回答を寄せられた。曰く、

鈴木主計氏の追憶

を感じたるなり。(本科一年二年は解剖、生理、薬物、化學、病理等を修め、三年から始めて臨床醫學の一部たる診斷學となつた) 云云。

當時助手としては上川謙三、金親雄等がゐた。内科は佐々木政吉先生、外科は宇野朗先生、産科は櫻井郁二郎先生が各々其主任であつた。而して屍體解剖は三浦守治先生及び今井政公氏が擔任さられたと思ふ。何しろ佐々木先生は獨逸より歸國せられたる直後であつた。

當時勢ひに上る「鉄人」とは、一九二〇年水蛭が人體より吸収する血液の量を測定すること」を命ぜられた。これが治療上、醫々水蛭を使用するも、其吸血量

不明なりし故であつた。今より五千餘年以前のことである。

金杉英五郎博士の追憶

明治二十年別課卒業生八十名中現在(昭和十四年)生存するもの二十
名にすぎぬ。就中先生と特に親し
かりし者に金杉英五郎博士と荒木
寅三郎博士との二人がある。

金杉博士は千葉縣人にて、私の同
業同縣人として大先輩である。明治
二十七年(?)東京にて耳鼻咽喉科專

鉢木翁は駒鹿後栗櫻園乘々町に賃
賜柄科専門を標榜して、一時大いに
流行を極めたものである。

した（「自分は二時校病にかかり先化の治療を受けたことがあつた」）。自分は後年獨逸國へ留學し、ミュンヘン大學に於てチーフセン爺に接する。時に西に於ては此人、東に於ては佐々木先生と直通し、間浦慎徳なる人格者をして先生を常に尊敬し、また弟子の一人たることを光榮なりと信じるも

先生は第二醫院に於て時々書食を喫さられた。而かも其食事は必ず御宅より陶器の辨當容器にて持參せられた。これは病院の賄食がお氣に入らぬ爲めかどうかは知るに由なきも、洋行歴の先生として一寸風變りなりと當時の助手連珠に自分は初に推察して呟つた、これ恐らく先生の令閨が用意周到の御辨當ならんと。御家庭の圓滿なるを樂望したものであつた。

(昭和十四年)生存するもの

生であつた。其故に先生を最もよく知りたるは全てあつたからと思ふ。

又は送別、又は防共協定の祝賀など
を漢詩に表し、之を朗吟する時、博士
も亦それに共鳴せらるゝ一人であ
るため、先輩なる博士へも亦一書を
送りて感想を徵することにした。然
るに博士は、昨年八月五日發行の日
本醫事新報に「佐々木政吉先生が憤
ふ」の一文を已に投稿されたあるか
以て、それに尙ほ數言を加へたこと
の回答であつた。今其のうちより抜
抄するに、左の如くである。

先生は温和忠厚にして孚つて愛敬であ
所であつた。ドアより即ち朝後直に
手のひら等を踏ぜるものが、所を簡
明にして理解し易かつた。
先生が大英第二病院長たり一時、財政
規定期限内に在りて、財政
内閣に由り、患者一人一例に銀三ヶ
月定められた事があつた。又新医者詮
察及識義のために、第一病院へ出張す
る一時の書類當は、お腹に鶴卵二個
を懸けたものと規定されてゐた。
明治二十七年青山博士が香港に於てヘ
ストリ機社へなられし際、子が東京醫
學會、國家醫學會及學士會を代表して
出發せんとするや、先生は予を宅に助
ひ、「下りて香港へ去れ」と下さるまじ
と誠意を込めて、青山先生の爲めに頼
まれた。

同二十八年予が肺結核病を發するや、
ベルツ博士、青山博士の他、先生も亦
予を命を委し吳口されるが、他兩博士も
同じく右肺に病變あるを認めるれた。
又數ヶ月の後、予の肺病變、全治を認
められし事は、他兩博士と等しかりき。
予の肺結核が全治せしことを證明すべ
き人、二人ありしに、今や先生逝かれ

しに由りて、只京大名醫教授中西尚本
郎博士一人のみとなりなり。

予は先生及び隆興博士との間に、純眞
なる友情と好感とを有し來りしなる。
予と東洋先生との間に恩情ありし様、
考ふる人無ざるべきにより、此の機會に
往々の眞相を闡明すべく一首する。予
が香港渡航するや、上海に一泊し、
周囲にて日本を西洋と呼び、日本で發
明せし人力車を西洋車と呼べるを知り、
たりに由り、明治二十九年東京築町
榮、私立病院を創立して、東洋・科
院院名づけた（蓋し東京、明治、日
本等の名に冠せらるゝに對して、日本
の意義で東洋としたのであつた）。

先生は、創立後或二日、院を訪問せら
れ「片栗と鳩尾をも葉子」一箱を贈與
された。且後見跡を離て、時の五大
新聞に廣告を出された。近頃に東洋內
科醫院と稱する者有之も拙者は重複
漏誤有り。駿河臺本東洋一右様の
文内に登場する様登場する。予は最初之を
知りさりして、病理學、愚痴、三浦守治
術と云つたが、當時は今よりして、急
な故で、俠き落路であつた。高田博士
の東洋内科醫院は、表通りを左に、西
側で鐵路の奥にあつた。駿河臺を良
く知らぬもの、田舎者、女中や小僧の如
き使者には分かり難い。そのため東洋
内科醫院患者の施取りが誤つて杏雲堂
に來たり、また杏雲堂に受診するも田
舎より上京せしものが裏通り、看板を
見て東洋内科醫院に入り、あとでそれ
と牴觸し、患者から説明せらるゝ事な
ど度重りしたため、故參局長の板垣

明治二十二年卒業に尙ほ平井毓太
郎博士と和辻春次博士とがある。平
井博士は京大小兒科擔任の教授であ
つたが、其音佐々木先生につき一年
間、神經系統疾患の講義を聽き、外
來患者診察にも隨つた。入院患者の廻
診にも隨つたものであつた。同博士
は特に治療（澤瀬興味を有せられ、この
患者には「タレモル」を奏効するとか、
何を用ひたが宜しいとか、批評して教
へられた。老生が今日尚ほ嚴守致しを
るのは、先生の「患者を診察せば常に必
ず詳細に症狀病歴を記録しおくべし。
後日被見して大いに得る所あるものな
上」との御遺言であった。

お目にかかりしは約三十年前、平塚驛
にて汽車が發するを待ちになら時で
あつた。先生吉蔵の視には、和辻氏と
申し合せ御祝申上げしも、平素は唯だ
年賀状を差しぐるのみにて、御無沙汰
に打過ぎたり云々。
ウキルヒヨウや、北の里や西郷吉義、

平井・和辻・宮入博士の追憶

明治二十二年卒業に尙ほ平井毓太
郎博士と和辻春次博士とがある。平
井博士は京大小兒科擔任の教授であ
つたが、其音佐々木先生につき一年
間、神經系統疾患の講義を聽き、外
來患者診察にも隨つたものであつた。同博士
は特に治療（澤瀬興味を有せられ、この
患者には「タレモル」を奏効するとか、
何を用ひたが宜しいとか、批評して教
へられた。老生が今日尚ほ嚴守致しを
するのは、先生の「患者を診察せば常に必
ず詳細に症狀病歴を記録しおくべし。
後日被見して大いに得る所あるものな
上」との御遺言であった。

お目にかかりしは約三十年前、平塚驛
にて汽車が發するを待ちになら時で
あつた。先生吉蔵の視には、和辻氏と
申し合せ御祝申上げしも、平素は唯だ
年賀状を差しぐるのみにて、御無沙汰
に打過ぎたり云々。

筆者（小池）曰く、先生は如何な

然れども所謂縦を以て寛と爲る、略を以て簡と爲ざるものであつた。唯自ら守ることは相當にして、他を顧ること薄かりしを以て、幾分此事に冷淡なるが如き觀ありしが爲めに、比較的別懇なう親友や、親密する間下が少かつた。これは事實であつて、爰りこゝ間を結んで自己の努力に費せんとするハ確に比すれば、上品にはまづくが、私獨寂寞の場合もあつたらうと思はれた。

又曰く、先生は治療上の他は何事に就けて、至て無頓着であつて、時として突如上人に政治財政に論ずることもあつたが、今も内務大臣に誰であるか、大臣の名は何よ云ふかなど聞くことは、毎常の事である。金穂一などは、毎常の事である。金穂一にて一方には些細の事を彼此言ふことも多かつたが、一方には柄をうけた。而して先生は常に「自分、財産が如何程であるか詳知してゐて、これにてはよく先生の性質風格を熟知してゐる。實際によく先生の性質風格を知せらる。一人である。從つて先生も亦よく博士の性質風格を熟知してゐられた。先生自ら博士に向つて、平素何と申されたかは、私として知る山もないが、先生が私語られし所によるとかうである。〔金穂は傑物であるから、彼を敵にしてはいけない。〕杏雲堂關係の宴會又は祝賀會席上にては、いつも必ず金穂博士が起

つて挨拶を述べられ、祝辭を陳べらるゝのであつた。先生は翌日又は機會ある毎に私に向つて、「金穂はシヤー」としてなか／＼旨い事をいつても言ふ男だ」と豊頬に微笑を湛へて博士を推崇せられた。

荒木・井上・川名三氏

の感想

荒木博士は多年京都市大總長の職にあり、其後學習院長となり、今は舊中顧問官の榮官を拜せられ、群馬縣の產など偉への一人である。明治十九年佐々木先生の講義を聽かれ、通暢明快の四字を以て評せられた。また先生につき特筆すべき點は、惟に正に之こと。即手に對して怒りを見せざりしこそと實に成績に値す。

井上博士と同窓なる明治二十一年卒業に、安房郡山病院長田名木博士が教へて説かれた。博士の言は簡單にして明瞭、率直にして深窈、蕩々として洋々、唯々吾耳に盈つるを覺ゆる。更に先生其人を評して、學んで厭はせざりしことを記す。博士の言は簡單にして明瞭、率直にして深窈、蕩々として洋々、唯々吾耳に盈つるを覺ゆる。

明治二十一年の大學生業生として人澤達吉先生、田代義徳先生など、極めて社交に長じ、所謂口も八丁、手も八丁、文も作れば詩も賦うといふ多才多能の人があつた。此兩先生の生存中に、佐々木先生に對する感想を聽くを得たるには、何か珍談なし奇行なり、語るべき材料を得たること思ふ。惜しいかな、兩先生とも七十三四歳にて昨年故せられ、今更ながら殘念に思ふ。而も吾先生に比して十二年の若者であつた。同

年卒業のうちに井上善次郎博士が、正直にして勤勉、長上者を尊んでいたこと（例へばベルト氏に對しても）、年一時になりても、二時になりても、泰然として諭誨せられしこと。出勤時間に正に之こと。即手に對して怒りを見せざりしこそと實に成績に値す。

明治二十二年卒業生中、私の面識あるものとして調査不一參及大高田岬安藤兩博士がある。蘭陽博士は早く北海道赴き、弘立北辰病院を開き、北門醫界の重鎮として開くうちに知られてゐる。私が存義堂平塚先生に勤務せし頃、則ち明治三十一年より四十一年の間、入澤博士と共に講義を聽いてゐる。博士は先生の朝直後一ヶ月間教授をうけたるも歸局には止まらずさりき。先生を評して、

正直にして勤勉、長上者を尊んでいたこと（例へばベルト氏に對しても）、

われは事實に相違するものである。當時ヨツホは試験動物について、かくくの成績を得たりと發表したのみにて人類の結核が治療するなどとは一言も云つてゐない。然るに全世界が買ひかり、歐米の著名なる學者が讀々と樹林に來たり、ヨツホに面會を求める傳授を乞ひたり、故「ヨツホは面會をも謝絶したうが當時の實況であると思ふ。從つて北の力にも及ばざりしを見るのが幸にして、北里が妨害せしと見るのは事實に反するものと思ふ。この條項は餘事に過すれば御参考までに申述べるまどなり矣。

私が小池顧ふに、私の大學生時代（明治三十一年以後）青山先生、緒方先生門下の助手連より、大學派とか、北里派とか、誰れ言ふとなく耳にしたこと記憶するが、北里妨害云々の言葉は遂に耳にしたことがない。原田男爵はさへ、佐々木先生から何等傳聞する所もない。

されば北里が妨害したことは、當時の所謂デマ放送なりしならん。佐々木先生は北里博士に對して、特に悪感もなれば、特に好感もない。全く嚴正であり中立の人であつた。されば後年、北里研究所より北里博士の名を以て、古賀液ナアノクアロールの追試を杏雲堂院長に依頼せられた時、先生は私を自宅に呼び、「今度北里君から古賀液なるものを試用して呉れ、液はいくらでも送ると頼んできた。君へ引き受け、あまり

ヨツホは試験動物について、かくくの成績を得たりと發表したのみにて人類の結核が治療するなどとは一言も云つてゐない。然るに全世界が買ひかり、歐米の著名なる學者が讀々と樹林に來たり、ヨツホに面會を求める傳授を乞ひたり、故「ヨツホは面會をも謝絶したうが當時の實況であると思ふ。

重症ならざる肺結核に試みて呉れ給へ」と申し渡された。私が其後これに關し、東京醫學會にて其成績を報告したものも、全く嚴正中立の立脚點から、公平に判断し、先生の許可を得て、北里博士に對する責任を果したのも、悉く誤りであつた。

橋本節齋氏の追憶

明治二十八年卒業の方にて、私の

面識あるは内田慎太郎、岡村龍彦、

川崎慶治、佐々木次郎三郎、下潤謙、太郎、中泉行徳、所本節齋、林蓮太郎、諸氏ある。就中橋本節齋先生は、私が大學に入りし當時、助教授として我等に診斷學の講義をなさる關係上、私は同先生に書を送りて、其感想を叩いてみた。

橋本先生の來書に曰く、

回顧すれば明治二十八年十二月大學を

卒業したる際、先生（佐々木）は既に

大學を離去せられ、更に助手として親

しく先生の御指導を仰ぐ機会を逸した。

たゞ在學中、先生の内科及び臨床講義

を拜聴する外、何卒先生に關する逸事、御特徵等を所知せず。然しこがら彼の

偉大なる襟格、健啖たる肚臍、清秀な

る眉目、美懿の容姿をもて教壇に立た

れ、皆叶期々、諱々乎として講演せら

れたるは、今猶は耳葉に存す。其風率

の眼前に髣髴たるを覺ゆるなり。仰來

幾星霜、平塚の杏雲堂分院より御歸京

の時、小生も別墅片瀬よりの歸途、時

を汽車中にて、眉宇に接した。

いつも夕刻のこととて、先生微醺を帶

する事の速きを覺えたものである。先生平塚分院を辭されてより以來、遂に御葬儀に接するの機なく、只晩年に能樂の太鼓樂子に然中せらるゝよしを屢々耳にし、何時か其御名詞を拜聽せんものと、心ひそかに期してゐた。しかし是外其機を逸したことを殘念に思ふ次第である。其後十數年の久しき御陳道に打ち過ぎ、詳細なる月日を辨にせざることを遺憾に感ずるものである。

川島慶治博士の追憶

川島慶治博士は、明治二十七年私

が第一高等學校へ入學せし頃、醫科

大學生にて、しかも陸軍依託學生で

あつた。當時同縣人といふ關係にて

相識となり、博士が文筆に極めて堪

能で、好みて詩歌を作らるゝことを

知り、また氣骨あらて容易に人に譲

らざる木訥漢なるとも知つた。後年

大學院學生として帝大に來り、青山

内科に入り、青山先生と意見の衝突

ありしやうにも灰闘した。今は豫備

陸軍々隊少將として優遊自適の身で

ある。私は博士が日本醫事新報滄海拾珠欄に、輓佐々木政吉先生詩を投

稿せられたるを見た。さなきに私は同博士は學生當時の所感を同ふことには、博士は私の依頼状に對する回答の前書きとして左の如く記してゐる。

故先生の教授振り及び學生に對する態度

先生より門主として教を受けたるは、内科各論の講義の他に、外來患者の診斷及臨床講義たり。其診療の指導に當て、親切篤厚にして同情あり。特に療法に就ても明到なる指示に資ならず。而して學生の誤解又は失念に對しては或る他の教授の如く敢て冷厲を放ち、學生をして泣面若くは憤懣せしむるが如きことなき。先生は講義に際し、苦研殆んどして明

確答を差上げかねる儀、幸に御諒恕を乞ひ、御下問へ條項のみ左の通り認めたり云々。尙故先生の計報を新聞にて承知せしもの太鼓樂子に然中せらるゝよしを屢々耳にし、何時か其御名詞を拜聽せんものと、心ひそかに期してゐた。しかし是外其機を逸したことを殘念に思ふ次第である。其後十數年の久しき御陳道に打ち過ぎ、詳細なる月日を辨にせざることを遺憾に感ずるものである。

四十年前侍講筵、當時印象尚今鮮。

聲咳難接門生恵。鹿島豪俊笑杜絕。

左の挽詩を造りたり。

四十一年前侍講筵、當時印象尚今鮮。

聲咳難接門生恵。鹿島豪俊笑杜絕。

る患者を診察なされても、自覺的並に他覺的所見と處置處方とを明記せしめ廻診の都度、経過がよかれあしかれ、更に一々其所見を列記せしめられることは、終始一貫してゐた。先生の所見によつて考究し習得するのみならず、此習慣は初学者をして知らず識らず診療知識を向上せしむることになつた。

和辻博士は京都帝大醫學部に於ける耳鼻咽喉科の創設者であり、現在

は同帝大名譽教授として開日月を送つてゐられる。同窓四十一名中、同學の人同田和一郎先生は已に物故せられ、即今生存せるものは九人か十人位に過ぎぬ。此クラスにて何か事ある時は、いつも必ずクラス代表として、教授に談判に來るのが岡田君であつたことは、佐々木先生より私に直接に聽いて所である。和辻博士の來信によれば、

小生は舊第一醫科時代、論文室に於いて打聽診につき、手を取つて起業をうけたことは外科にある、地力病院、勤務する前の事にて、此時特に池谷師弟の間の厚情を感じてゐてゐた。又隆興博士を京都大學へお組みせし前、種々先生の御高配をうけ感謝してゐるものである云々。

明治二十二年卒業の一人なる宮入慶之助博士（九大名譽教授）の報する所によれば、

佐々木政吉先生といへば、卵巣が直に私の眼の前にあり、と浮びます。當時大學病院の玄関を入りて、右の廊下

は外科に、左の廊下は内科に屬し、其の外科の廊下へ曲らずに僅か進めば、同じ側に、佐々木先生の外來患者診察室の入口がありました。先生の御姿は向に立派に見上げらました。懸念申せば、もう少々御身長が高かつたらと、男聲で、急がず、追加で教へられる。敢て所能を盡します。限られた時間に於て、内科學の領域に渡り得なくとも、仕様がないでないか、といふやうな御氣持をまつてやうに、今日からも想ひ頗みちやこ。

先生の御晩年、御永眠、御葬儀、總て世の常の行き方、謹み、人生最後の御式も、御近親のみにて執り行はれた。らしく、總て是も先生平生の御希望と、御近親無類の御理解に基くものと察し上げられ、さてこそと舊時の思ひ出でられ、ありがたき縁とと覺え仰がれます。

原田熊雄男爵の追憶談

明治二十二年（西暦一八九〇）伯

林にて開催せられたる第十九回國際醫學大會に於て、ローベルト・コッホ氏が「試驗管内の微生物、動物體内に於ても、結核菌の成長を抑制し得る物質」の製造に成功した旨を報告した。それは今日の所謂「コッホ・ベルタリン」であつた。我國政府に於ても、

佐々木先生は渡歐に際して、先生の親友にして理科大學教授なる理學博士原田豊吉氏（少年時代より獨逸に留學、

地質學研究）が、豫てから肺結核なりし爲め、氏の父男爵の懇願を察れて、

同じ側に、佐々木先生の外來患者診察室の入口がありました。先生の御姿は向に立派に見上げらました。懸念申せば、もう少々御身長が高かつたらと、

男聲で、急がず、追加で教へられる。敢て所能を盡します。限られた時間に於て、内科學の領域に渡り得なくとも、仕様がないでないか、といふやうな御氣持をまつてやうに、今日からも想ひ頗みちやこ。

先生の御晩年、御永眠、御葬儀、總て世の常の行き方、謹み、人生最後の御式も、御近親のみにて執り行はれた。らしく、總て是も先生平生の御希望と、御近親無類の御理解に基くものと察し上げられ、さてこそと舊時の思ひ出でられ、ありがたき縁とと覺え仰がれます。

日本には獨逸醫學者中で、まだ評論につき廣く擇擧する處あつてから

コッホ氏に面會せられたといふ。先生が私に當時の事を有接語られし處によれば、コッホ氏は切而會の時に、日本

政府よりの官命にて出張し、且つ患者一名をばるゝ日本國より同僚等と皆を語りた。時開、コッホ氏の顔面に不

安の色、遂懶子萬といつたうの態度が看取せられたといふ。また先生が屢々原田熊雄男爵（博士の嗣子）に語られたといふ處によれば、コッホ氏が先生に對して、ヨン一病人を迎えて来て居るとして、大いに小言を云はれたたため、爾來先生はコッホ氏との關係を面白らず感した。それで、原田博士は

一ヶ年餘休に滞在し、病室にてコッホ氏の注射治療を受け、先生より早に歸國した。而して二十七年十二月に逝去せられた。

先生は獨逸よりの歸途、今度は米國經由をなさんとの考を有せられしも、當

時木戸孝允氏の嗣子が獨逸にあつて疾病にかかり、それと同僚獨逸する

ことを忠告せられ、已むなくまたもや印度洋を渡ることになつた。然るに此

病人は洋上にて重態に陥り、遂に歿す

とか、又は北里が妨害せしなりとかの

ゆかれ、コッホの研究所に於て研究の

抑志望なりしを、コッホが受諾せざり

しは、北里が好意を以て斡旋せざりし

とか、又は北里が妨害せしなりとかの

評もありたりしが、愚考によれば、夫

高木友枝博士の談話

高木友枝博士は曾て臺灣に於ける最高衛生技術官として令名あつて有名である。私は博士と年配に於て著

名である。私は博士と年配に於て著

で、届發のまゝ本國へ持ち歸るべく、船中にて一方ならぬ苦心を嘗めたと述懐せられた。私が分て或る人に廣つて先生の船中苦心談につき此病人を原田博士と言つたのは誤りである)。

先生が後年、大學教授辭職後になりて、同行することになつた。先生の直話によれば、先生は最初米國渡歐の考へなりしも、原田男の想請を許容し病

人を同伴する開港場上、印度洋紹由に變更せられた。先生と二回目の渡歐では、伯林には獨逸醫學者中で、まだ

日本人の留学生間にも多くの知人ありし爲め、クベルタリの効果、成績批評等につき廣く擇擧する處あつてから

日本には獨逸醫學者中で、まだ評論につき廣く擇擧する處あつてから

置に立つて折々得意の技術を弄してゐる。物蔭に聽いて居られた本物の先生が、によつと出現せられ、思にね爆笑したことでも度々あつた。

こゝしそれよりももつと教説としての特色を多分に見えてと思ふのは、例の「Hinck」の時間であつた。講義その物から云へば、内科各論、それと大差ないのであるが、患者ニアタモントとを前に、階段講堂の真中に位置を占め、例に依つて開け一番「ネー、諸君」と呼び、薄々として臨床講義の本筋に突進される時の雄威は實にもと仰がる大先生の風貌であつた。先生自身におかれて、二にて恐くて「順番」を解りしめ、努力して教室内の空氣を清新にしておられた。

四、其後三浦謹之助先生が、獨佛の留學を終つて歸朝を以て、内科學の一部署を分擔されることとなつて。最初と共に今次卒業試験中の内科試問は三浦先生に依つて行はれると、其の情報が傳へられた。これは今日までの内科主任佐々木先生からこそ受験すべきが至當だとの主張が、*卒業受験生*側に在つた。そこで事務の鈴木忠行君より折衝となり、學長大澤謙一先生への歎願ともなつた。しかしそれは當局が三浦先生にすべてを一任された後であり、最早それを如何ともすべきからざりの折衝となつてゐた。その上九月下旬には(明治二十八年)既に佐々木先生御退職のことが發表となり、問題は當然

既定のまゝに落着いてしまつた。

五、序ながら、ことに聯想した。御先生東洋先生の片鱗につき、一言。これは私事であり、甚だ恐縮でもあるが、笑ひとなることも度々あつた。

明治十九年卒業のものは、二十二名であつたが、現在生存者は九名に過ぎぬ。其うち自分と面識あるものは唯だ三人のみだ。佐々木先生に従つて私は腰脚を曳きずつて駿河臺の舊杏雲堂醫院に通ひ積むた。これは勿論、當時日本第一の人醫として、雷名を轟かして居られた、佐々木東洋先生の治療を請ひたのであつた。診察順番が来て、始めて老年の患者に臨まる度の峻厳なるを見、私は殆んど肝を冷ました。しかし杏雲室の中には毎日先生から叱られた話で持切りといふ有様であり、それで自分も胸を撫下ろした。しかも叱らる通しの先生に不思議にも患者が皆、全幅の信頼をかけてゐた。だからこそ杏雲堂醫院は、今も同じ文字通り門前市を爲すの盛況を呈してゐる。

六、東洋先生の前に出ると、人に皆で宿題目と感を抱いたと、其のが事實である。後の政吉先生と相對すれば、春鳳麟藻の中に在るのを想はしめた。先生父子は此點に於て世にも珍らしい對照であつたことを、私一人の體験からでも述べ得るのである。

以上、四、五十年の昔に溯る私の追憶、餘りにも有りふれた觀察、しかも多少の誤さを保し難い。その漫宣し御取捨を願ふ外はありませ。何

か木先生に對しても亦何事か記憶に存するものあらんと思ひ、博士にも一度も教頤の至りです。之を以て小池博士の御需めに應じまして以上、

志賀潔博士の追憶談

明治十九年卒業のものは、二十二名であつたが、現在生存者は九名に過ぎぬ。其うち自分と面識あるものは唯だ三人のみだ。佐々木先生に従つて私は腰脚を曳きずつて駿河臺の舊杏雲堂醫院に通ひ積むた。これは勿論、當時日本第一の人醫として、雷名を轟かして居られた、佐々木東洋先生の治療を請ひたのであつた。診察順番が来て、始めて老年の患者に臨まる度の峻厳なるを見、私は殆んど肝を冷ました。しかし杏雲室の中には毎日先生から叱られた話で持切りといふ有様であり、それで自分も胸を撫下ろした。しかも叱らる通しの先生に不思議にも患者が皆、全幅の信頼をかけてゐた。だからこそ杏雲堂醫院は、今も同じ文字通り門前市を爲すの盛況を呈してゐる。

七、東洋先生の前に出ると、人に皆で宿題目と感を抱いたと、其のが事實である。後の政吉先生と相對すれば、春鳳麟藻の中に在るのを想はしめた。先生父子は此點に於て世にも珍らしい對照であつたことを、私一人の體験からでも述べ得るのである。

八、以上、四、五十年の昔に溯る私の追憶、餘りにも有りふれた觀察、しかも多少の誤さを保し難い。その漫宣し御取捨を願ふ外はありませ。何か木先生に對しても亦何事か記憶に存するものあらんと思ひ、博士にも一度も教頤の至りです。之を以て小池博士の御需めに應じまして以上、

私(博士)は明治二十五年東京第一大學に進入したが、大學の内科には佐々木、青山兩教授が居て講義をされ、一方ベルク博士は臨床講義及び外來患者を診察してゐた。三浦謙之助教授が診斷學を受持つて居られた。學生間には佐々木、青山兩教授の封稱が何時も語題に上るのだ。佐々木先生は態度に落付きがあり、ドッシャリして居り、親切で、講義が緻密で(ダーディック)、學生にはヨク列るし、よく頑に語るを欣快とする一人がある。醫學博士志賀潔君其人である。私は同博士より卒業一隔り六年の後輩であるが、往々獨逸留學の際に面識したるを始めとして、爾來年を重ねるに從つて親しくなつた。且つ其好む所を同じうする點から、數年前のこと、舊師を招待して報恩の宴を催された際、私も陪席したことがある。此舊師とは四十餘年前の數學の先生松岡文太郎翁のことである。私が偶然このことから翁の住宅を知り得たことと、博士に語りしに一ヶ月後と共に懐舊談を試みんとする事になつた。先生の天性に教ふる程の人は、自然に自分でも舊恩師を憶ふの切なるものがある。かゝる關係と識れる私は、佐々木先生に對しても亦何事か記憶に存するものあらんと思ひ、博士にも一度も教頤の至りです。之を以て小池博士の御需めに應じまして以上、

九、私が第一高等學校本科一年の時と思ふが、佐々木先生は歐洲留學より歸朝されて、高等學校大講堂にて講話があつた。「冷水療法と健康法」といふ題であつたと記憶する。先生は現下歐洲に於て行はれて來る冷水療法といふものは

瞭、窓掲迫らず、筆記するには尤も都合好かり。尤も内面各論の呼吸器病は篇中嘔氣・肺炎の項に於て、「...Reputatation(赤色肝硬化)」を解説せらる。何の事やら望洋の嘔を發したりしも、兩次講説の進むに従ひ稍理解するを能たらるを記憶す。消化器病論に於ては「...類を新に生じれ、中にtoxophtalma(Gasteria)」中は性骨炎)」を項などあり。

當時受験生の某氏より、受験項目中に該病名あり、其如何なるものなるやを質問されたる事あると謂は記憶す。

先生の逸話

先生の教室に助手等、して出入りせり。某平素委曲に心細くて、唯だ牛車の轍に沿ひて、視て、我獨りこの振を有するに過ぎず。遂て所謂落語のものを記せず。但し落語の山上駒殿は各科の教授會同、喫食す。之機とかくしと見え、他行の教授の如きをかりしも、と思はる。一日文部省立農林學の某教官、外來を考へて「受詮」にてたるに、先に之に眞似の子、其と貌する姿態に歎し、一サマトマントと思はれたまに于て、一後後、即ち椅子の背後より、患者の肩を叩き、咳え聲生然るべき音申渡され、少子言として患者の退去を促せり。後に於て傍人より、彼の身分を聞知し、果して然りしやと苦笑せられたるを記す。

下瀬謙太郎氏の追憶

下瀬謙太郎氏は陸軍少將として今は後備に編入せられたること、文筆に親しみ、中華民國の事情に精通してゐる、ここは、世人周知の所である。

私は大學三四四年生の頃、氏が内科の助手として患者を臨床講義場に連れ来り、講義終了後に、肋膜炎につき我等の或者に對して説明せられし時、始めて其姓名を知り、其の眼青の尋常ならざるを認めたり。後平氏が伯林留學中、私の親友秦君と相往来せられたることによりて、私も亦自ら親みを感じ、被會ある毎に、ますます氏に敬意を表し來つた。今回も亦氏に向て二書を發したるに、果せるかな、私の期待は空しからず、氏一流の文章を以て、直に回答を與へられたるに石なるもの、氏に滿腔の調意を表せざるを得ぬ、乃ち左に氏よし拜受したる全文を掲ぐる所以である。

「四百一十年前後であつたか、大學教授を中心として、通俗學術講演會といふものが折々催された。會場は神田一ツ橋に在りたる大學傳習門内の大講堂にまでてゐる。講演者、類派にしては、皆第一流の人物であつたことを、筆者によれば、憶念難いが、ひどく知れぬが、三宅秀、長井長義、小金井良輔、佐々木政吉、井上哲次郎、北尾次郎などの講先生であつた。當時神奈川第三師生であった我々は殆んど毎回聽講に出席したものだ。

北尾先生は颶風の話、井上先生は哲學の話、小金井先生はアイヌの話、三宅先生は臘膜の話……。佐々木先生は冷水臘膜の話であつた。今までこの冷水臘膜といふことは國民の間に常識され、男女老幼殆んど悉くその利益に資してゐたが、これに至り佐々木先生當時

の先唱から始まつたものである。

こうであつた。それは、ボリタリに限らず、病室の病室でもその通りだ。

それほど偉大な效果を生み出した講演ではあつたが、當日の演説その物に対する一般的の印象は、有體に申せば、餘り香ばしいものではなかつた。それと云ふのは、滿堂の聽衆が幾度か失笑して、演壇の先生をして立往生せしめたのであり、先生の爲には寛に同情に堪へないものであつた。つまり事實は、平凡の言葉を以て同一の操作を繰返し繰返し解説されたといふのであつて、亦氏に向て二書を發したるに、果せらる爲に、どこまでも丁寧親切に説明の労を取られたのであつた。要するに大衆相互の通俗演説にお慣れにならぬ先生としては、至る己もを得ないことであり、拜受したる全文を掲ぐる所以である。

「四百一十年前後であつたか、大學教授を中心として、通俗學術講演會といふものが折々催された。會場は神田一ツ橋に在りたる大學傳習門内の大講堂にまでてゐる。講演者、類派にしては、皆第一流の人物であつたことを、筆者によれば、憶念難いが、ひどく知れぬが、三宅秀、長井長義、小金井良輔、佐々木政吉、井上哲次郎、北尾次郎などの講先生であつた。當時神奈川第三師生であった我々は殆んど毎回聽講に出席したものだ。

北尾先生は颶風の話、井上先生は哲學の話、小金井先生はアイヌの話、三宅先生は臘膜の話……。佐々木先生は冷水臘膜の話であつた。今までこの冷水臘膜といふことは國民の間に常識され、男女老幼殆んど悉くその利益に資してゐたが、これに至り佐々木先生當時

の心は何時も引寄せられてしまつてゐた。それはほんの或日の一例に過ぎないが、斯くして先生の臨床との神技に學生達は只一眼便に驚いてしまつてゐた。心は時々引寄せられてしまつてゐた。

三、先生の一つもの「Professor」講演は只一眼便に驚いてしまつて、その心は時々引寄せられてしまつてゐた。

二、Professorに於ける先生は、どうな患者に對しても一様に物腰しく、一聲で「學生などへの當りも柔らかく、周圍に顕著そろへてゐる學生達を見廻はばれた。

「えー諸君、これはこのー」と、のびのぶ有様、そんな時の先生のなつかしいお姿が今も専われて、眼前に残つてゐる。又太いお聲は、場内に行されただけで、學生も患者も漸し、懸せられし中には先生のその聲色を巧みにやる者が數名ほど有つた。先生のいつもの位

有するに至つた。

私は明治二十五年獨協中學（普通科）生の頃、今の隆興博士と同窓なりしたが、駿河臺なる御邸を屢々訪問し書齋に入りて共に漢書を見たり漢文につき話し合つたりして、時に夕飯の馳走にもなつた。其頃或日豊額巨軀の先生が、綿の淡茶色の綿入の袖筒のドテラを着流して一寸入口に現はれ書齋の一角に立て莞爾として私に對し唯だ一言「よきまし

たな」と申されて直に廻れ右にて徐ろに引きこられた。あゝ悠然たる態度の後姿はいま尙ほ私の眼前に浮かんでゐるものがある。青年時代の印象は格別深きものであり、今より之を憶へば先生は當時大學教授であられ、同時に杏雲堂醫院に副院長として毎週幾日か診察せられたやうである。お平も卅七八歳であられ、自分で十八九歳であった。

一高入學前のこと、私は急性腸カタルにかかり、一日數回づつ下痢し血便を混する程にて瘦せ衰へて骨と皮になり、數日就寝休養せるも快い傾向なきために遂に當時の隆興學兄にお頼みして御本宅を訪ひ先生の診察をうけた。此時まだ年少で素人の悲しさ、恐くは絶望ならんとの考へにて、受診に先立ち身後ノ記念と思ひて途中で寫真を取つてから駆除として推參した。

而して、御本宅の玄關奥の八疊間（廊接間にて、私服姿の先生から診が附きステキであったことを今以て

察をうけ、終りて處方箋を預きたる

記憶する。

降興博士も私も共に一高學生時代のことをあつた。當時博士は一刀流小栗義三郎先生の高足として知られた爲の一高劍道部に於ける指南格の一人でもあつた。

それは重病人のみが深く感銘して長く忘れ得ぬ言葉である。それがあらぬか

歸途の氣分の爽快さ、闊歩の足の輕

快さ、病苦を忘れた明快さは未だ一

上は治癒に向ひたる心地がした。

先生が堂々たる體躯を有し、便々

たる太鼓腹を持たれることは、一度

先生に接したものゝ直に看取した所である。明治三十五年の暮に、私が大學を卒業した時、私は貧賤生在りし爲めに、先生の金剛芳子夫人の好意慈悲により先生のフロウタコートや、外套を預戴した。然るに自分は常人以下に瘦せてゐる爲とに、すべてがダズノードであつた。但し大なる部分には少しも差支なく當時位々木家のお出入の洋服屋京橋銀座の新川といふを呼び、私のために直させて下された。上衣やショツキは上乗にて申分なく、よくなつたが、ズボン丈は私にとりてあまりに太く、あまりに短くあつた。太さのみをつめて長さがせなくともよい」と。これには一本参考したのである。何と云つても先生の服であるから、品質に於ては極上等であつた。從つて何人の前に出たと。私に其當時これをきて、さうだ

が言葉に沁みくと思ひ當るのである。

如何にも甲様なく、閉口頓首、平心低頭して垂らざるを得ぬ。

私は大學三年生の頃、夏休暇の或日、平

家海岸の杏雲堂分室に遊び、先生に親

とお目にかゝつたことがある。其頃我々は大學にて診斷學の實習を入深先生にて神經系統の講義を三浦先生に學んだ時の事にて、先生からいろ／＼御尋問やらお話しがあつた。先生には病院の入院患者の廻診をおこなつて、海濱松原のうちで最も小高い處に建てられてある御化道部に於ける指南格の一人でもあつた。

それゆえ寒稽古の時期には午前四時に駿

河臺なる自宅を出て、徒步にて不遜追分の一高校舎まで責任上毎朝飯前に出張せられたる。

佐々木家の附子、將來杏雲堂を双肩に荷ふべき重大責任を有する此人が、朝の四時にお出かけになつたのだから、我々の下宿住居とは異なり、玄關子は門を開き女中は玄關に送り、芳子夫人（母上）はさうに早く起きて何かと世話をなさることにならぬ。謂はゞ何かにつけて自然と大袋袋となる謬でもあらう。

或日朝の剣道場に博士の顔が見えたが

いた。若だ立たぬであつたが、出勤が可

なりて躍躍して六時頃、已に夜が明けて

あたゞ私は朝氣よく、前日の遅刻の理由をきいて見た。然るに博士曰く、昨

日は弱つたと、親父に呼びつけられて、

「おはようござります」

とおもよ。またそんなに室内中をさはれて治るか。外に新らしい事はないか。

まあシカカリ勉強するんだな！」と、偉大なる體躯に白の大綿の浴衣をひつかけて、徐るに廊下傳ひに風呂場の方へと立

ちゆかれた姿は、四十年後、今日も眼底深くとまつて私に、尚ほ忘れられぬ。

私が明治三十一年十二月東京帝大を卒業して、直に圓田和一郎先生の下に、耳鼻咽喉科助手とし、勤務するに至つたのは、佐々木先生の命であつた。それは私として卒業前から將來杏雲堂に勤むる約束が成立し、先生の持論として呼吸器病患者を診療する醫師は自分自身喉頭検査が出来なくては不都合なりといふ見地か

先生の指導振り

私が明治三十一年十二月東京帝大を卒業して、直に圓田和一郎先生の下に、耳鼻咽喉科助手とし、勤務するに至つたのは、佐々木先生の命であつた。それは私として卒業前から將來杏雲堂に勤むる約束が成立し、先生の持論として呼吸器病患者を診療する醫師は自分自身喉頭検査が出来なくては不都合なりといふ見地か

健康上實によい方法であり、之を日本
の學生青年に普及させたいといふこと
で、説明されたのであつた。曰く、人
體の皮膚といふものは、寒暑に対する
保溫被關であるから、之を逃さにし、
其機能旺盛ならむるは寒暑に堪へ
る所以である。

毎朝早く床をぬけて起きると洗面所に
於て裸となり、又は肌をぬぎ、手拭と
水に濡してキリットと満り、之を以て
手より腕、頸、背、胸、腹、次には脚
まで摩擦するのである。皮膚が赤くな
るまでこらむと其後は全身の温暖を感じ
る。即ち冷水摩擦に精神を爽快にし
血液の循環をよしし、健康を増進する
のである。學生の神經衰弱などといふ
は、まさに氣分から起るものだ。冷水
摩擦を行へば、神經が強壯となり、精
神爽快となり、血液循環が旺盛となり、
元氣が出て、活潑となり、健忘が出来
る。記憶がよくなり、神經衰弱などは
飛んで止まる。故に學生青年は是非冷
水摩擦を行ひておきる。即ち之が實行を
勧めて。毎朝早く起きると、直ちに真
裸となつて手拭をしてから冷水摩擦を行へ、冷水摩擦を行ふ時は、精神爽快
となり、冷水摩擦後に換衣しなくして説
明され。其親切振り、詳々として説
いて傳えたる態度には、一同敬服し
たものである。

其後をうけて、偉大なる體格の浪尾新
(當時文部省視事官?)が立つて、オツ
アスマオード大學(?)寄宿舎に居た時
の経験談として、大學學生が早朝起き
ること、直に冷水に飛びこみ、水
から上つて來ると乾いたタオルで皮膚
全身を摩擦する狀態を説かれた。あの

偉大なる體格を實物供観のやうな態度
で話され、又セビのある大きな音聲で
演説されたのが、今も尚ほ目に残つて
ゐる。

之が我國に於ける冷水摩擦の輸入され
宣傳され、實行された初めてであり、之
によりて冷水摩擦が學生間に忽ち廣ま
つた。之は體位向上、厚生保健上、我邦
の歴史に特筆大書すべき事項である。

佐々木先生は「初は診斷學、次はボリ
タリ及び内科講義もされたと思ふが、
私としては、先生からボリタリ、内科
講義を聞いたやうに記憶する。

佐々木先生は學生間の評判がヨカツタ
勿論他の諸先生以上です。私は特に佐
々木先生に私淑して居た。佐藤恒九君
が留任運動に小金井學長の所へ行つた
のは、學生の意見の代表と見てよいと
思ふ。恒九君は學生で一頭抜いて居た
し又教授間にも覺え目出たい方であつ
たから云々。

佐藤・林兩博士の追憶談

男爵佐藤達次郎博士も亦志賀博士
と同級の一人である。佐藤男爵は學
生時代を回顧して曰く、

佐々木先生は講義を始める時に、卷煙
草を街へ教場へ來しれ、半分位まで
吸はれて、傍の机の上へおかれるのが
例になつた。講義がすみて、退場せら
るゝ時にはいつもそれを忘れてゆか
ると、級中「喫煙家の或者は急いで
それを取り、吸つてゐた。よく見ると
當時一箱七錢のカメオといふ巻煙草で
あつた。

明治三十年卒業にて、今を時めく
公衆衛生院々長で、且つ東大名譽教
授である林森雄専士がある。私は三十
一年一高より東大へ進入せしものな
がら、當時の大鳴は講堂でも病室で
演説されたが、今も尚ほ目に残つて
ゐる。

之は體位向上、厚生保健上、我邦
の歴史に特筆大書すべき事項である。

佐々木先生は「初は診斷學、次はボリ
タリ及び内科講義もされたと思ふが、
私としては、先生からボリタリ、内科
講義を聞いたやうに記憶する。

佐々木先生は學生間の評判がヨカツタ
勿論他の諸先生以上です。私は特に佐
々木先生に私淑して居た。佐藤恒九君
が留任運動に小金井學長の所へ行つた
のは、學生の意見の代表と見てよいと
思ふ。恒九君は學生で一頭抜いて居た
し又教授間にも覺え目出たい方であつ
たから云々。

三十餘年も若い丈けに、一段と若く
從つて美男子、否好紳士であり、誰
云ふとなく、アレが昨年優等で卒業
の林君といふのであると話し合つた
ものだ。こんなことに御本人は知る
譯もないが、後年此の林さんが佐々
木家と御親類關係となられたゆえ、
何つた譯である。

私は(林博士)が佐々木先生に、先生にし
てお目にかかるたびに、醫科大學二年
生の時にて、明治二十七年の九月、第
一學期内科講堂に於て、エビノヨック
スの講義を聆聽したのが最初であります。
堂々たる風采に、學生一同は大い
に感に打たれたのであります。二十八
年迄一年間師事したのであります。

謹嚴なる先生と思つて居たのですが、
唯だつてビクトドがあります。それ
は外來診察で、大便を鏡検中、同級の
一人が一小蟲にて其の周圍に毛の生へ
たものを見付け、先生に見て貰ふと云
ふのであつたが、其内にその蟲が見え
なくなつて、種々苦心してさがしてゐ
る。すると、同様の形で毛のないものを漸く
見付け、先生に示して、その話をすると
と、先生眞面目な顔としながら、さう
ですか、それで此奴は年寄で発げて
しまつたのでせう、と言はれたので、
学生一同は大いに笑ひつゝ、先生のユ
ーモアに感じました。

尙ほ二十八年、先生が大學を辭職され
て當時新學士の林さんがテニスをな
しつゝあつたことを記憶する。林さ
んは今日と異なりて頭髪も澤山にあ
り、今も尙ほ隆溝青眼にて獨特の音
聲を有せらるゝが、當時は今よりも
タ式であつた。内科病棟の前に櫻木
院宣傳され、實行された初めてであり、之
によりて冷水摩擦が學生間に忽ち廣ま
つた。之は體位向上、厚生保健上、我邦
の歴史に特筆大書すべき事項である。

佐々木先生は「初は診斷學、次はボリ
タリ及び内科講義もされたと思ふが、
私としては、先生からボリタリ、内科
講義を聞いたやうに記憶する。

佐々木先生は學生間の評判がヨカツタ
勿論他の諸先生以上です。私は特に佐
々木先生に私淑して居た。佐藤恒九君
が留任運動に小金井學長の所へ行つた
のは、學生の意見の代表と見てよいと
思ふ。恒九君は學生で一頭抜いて居た
し又教授間にも覺え目出たい方であつ
たから云々。

先生の印象

私が始めて佐々木先生の御面を識
つたのは、今より四十八年前の明治
二十五年である。それ以前私は田
舎にありし時已に先生の高名を知り
戸ツ子らしく、若々しく、潤澤機敏
らしく思はれて、子供心に慕ながら
憧憬を懷いたる。殊に私の恩師木村增
太郎先生(別課十九年卒業)から「色
々其學徳につき書きかされて、未だ面

識せぬうちから、崇敬の念を多分に
ありました。其内にその蟲が見え
なくなつて、種々苦心してさがしてゐ
る。すると、同様の形で毛のないものを漸く
見付け、先生に示して、その話をすると
と、先生眞面目な顔としながら、さう
ですか、それで此奴は年寄で発げて
しまつたのでせう、と言はれたので、
学生一同は大いに笑ひつゝ、先生のユ
ーモアに感じました。

尙ほ二十八年、先生が大學を辭職され
て當時新學士の林さんがテニスをな
しつゝあつたことを記憶する。林さ
んは今日と異なりて頭髪も澤山にあ
り、今も専ほ隆溝青眼にて獨特の音
聲を有せらるゝが、當時は今よりも
タ式であつた。内科病棟の前に櫻木
院宣傳され、實行された初めてであり、之
によりて冷水摩擦が學生間に忽ち廣ま
つた。之は體位向上、厚生保健上、我邦
の歴史に特筆大書すべき事項である。

佐々木先生は「初は診斷學、次はボリ
タリ及び内科講義もされたと思ふが、
私としては、先生からボリタリ、内科
講義を聞いたやうに記憶する。

佐々木先生は學生間の評判がヨカツタ
勿論他の諸先生以上です。私は特に佐
々木先生に私淑して居た。佐藤恒九君
が留任運動に小金井學長の所へ行つた
のは、學生の意見の代表と見てよいと
思ふ。恒九君は學生で一頭抜いて居た
し又教授間にも覺え目出たい方であつ
たから云々。

しためた患者でも、先生自らその悪臭を嗅ぎつけざる限り、診断は？のままであり、時として患者が其の治療をして一週二回の先生の回診時には、偶然にも悪臭の咳痰なしに経過せることも私が平塚時代に経験したことである。

のくせ臨床講義にては腹水の穿刺法は未だ記載されなかつた。先生は皮下注射、經脈内注射に於ける針の持立ち方、注射部位の選び方など、教へられ、更にダム・アーチュア氏の *Treatment of suppulsive Thropic* を讀む。勵められた。先生の治療に対する御注意には、自己責任ある實地醫となつて始めて其の手口を身に付けておきたい。

製法を見學し其用法を習得したもので生むる。散薬の中へ丸薬を加へて、丸散薬となし患者に投與し、其藥効を全からしめ其服用を容易ならしめたものであつた。また當時好みて使用せられたて肝油の空剤の如きも他に比類なき杏葉堂獨特の調剤法であつた。

のもあり、また北海道及東北地方から年々冬期のみ來り、入院して療養するものもあつた。

先生の性質は直直にして且つ几帳面なるがために、それが虚方の上にも現はれる。例へば普通の人ならアスピリン一日量二粒とか、三粒〇とか處方する處を、先生は一日量二粒、三粒〇とかなきる。これは一日二回に分服するのに一粒〇でも二粒〇でも三粒〇で三にて割ねからである。私は平塚分院時代に於て先生が一遍二回出診せらるゝに當り、アスピリンを一日量〇・九粒も始め、毎回二粒増量して、一日量三粒に至り、持長して服用せしめたことをあつたのを追憶する。

或は業師も先生に對診を依頼し、
診察後に處方へ御願ひすと申し出で
たるに對し、先生が主治醫の處方ア
スピリン・○を○を一レシピ、ピラミ
ドン〇・三を〇・四五と訂正せられた
それを以て主治醫は人に語りて曰く
「佐々木先生は無暗に他人の處方に
少しばかりの手を入れる」と。是れ
先生の薬剤に對する概念を彼氏は知
らぬからである。

現今の醫大にては如何なるや知る所も
ないが、我々が大學を卒業する頃は、皮
下注射の方法こそ教へられなかつた。そ

は前からその方法を例が出来たのである。精神の発育はおこしても、醫學上封する實際の知識がなくては、醫療の完全な期する誤にまるで組。況んや日進歩の勢を以て、新薬新器械が、當時歐州に於て發表せられ、其が輸入せらるゝに始めてをやる事多。私は杏林堂に入りて、薬局に出入し、此方面的知識を貰た。

今日でこそ、製剤として丸薬もあり、錠剤もあり、注射液も一々アルブルに入りて發賣せらるゝが、昔は注射液を自ら調剤したものであつた。丸薬も毎日、又は毎月新たに作成したものであつた。其

のくき臨床講義にては腹水の穿刺法は主に
された。先生は皮下注射、經脈内注射の
於ける針の持の方、注射部位の選び方等
で教へられ、更にダム・シムト氏の *Treatment*
nicht der symptomatischen Therapie を讀んで
勘められた。先生の治療に対する御注意
は、自ら責任ある實地醫となつて始めて
其の有りがた味を知る事である。

杏雲堂には、佐々木東洋先生以来、杏
雲堂實歴なるものがあつた。恐らくは今
もあらう。これは東洋先生、攻吉先生、
代々を通じ、獨特なる藥説調剤法、藥劑製
法、用法慣用處方例が數百項に亘りて
記入せらるゝある。初學者即ち新參者は
記入せらるゝある。初學者即ち新參者は
先づ之を一讀することと、藥局に入りて
二三ヶ月間調剤法を見學することとなつ
てゐた。これがまた容易でない。極易で
ないとしても、其れを知らぬ間は、先生
の傍にありて處方書きともなれぬ誤である。
例へば神効水に何か、健胃水とは
何れ、胃散とは何か、東洋丸とは何か、
名稱のえ難くて内容成分も知らずとなり
ては貴任ども醫師として然ニ立たぬこと
になる。この点から乍ら、年々成長して、寶く
なる。この點を重視する所である。

熱心な結核治療

私は明治三十七年二月から、杏葉堂平塚分院に奉職勤務した。佐々木森男氏に代りて副院長となつた。當時は結核療法にてトルの靜脈内注射療法の行はれし時代であつた。しかし極めて輕症結核にのみ注射したから、有効と思はるゝやうな例はあつたが、注射のために悪化したと思はるゝものには遭遇しなかつた。主として入院患者に限りて行ひ、注用量も極めて微量より漸進的増量方法を守つたことは、常に先生の御法薦御指導に由つてからである。

せられた計りのマルセレック氏血清を取り寄せて使用せられた。先生の結核治療に對する熱誠には、患者も殊の外感激した事を私は記憶する。種々なるツベルクリン液の注射療法の外に、特殊の結核患者に對して、海水の皮下注射が施行せられたこともあった。これと獨逸の結核雑誌に於て、有効なる新治療法の一つといふので、先生が當時の薬局主任河合龜太郎氏（今い葉夢博士、日本薬剤師聯合會會長）をして平塚海岸海濱約二里位の處より、海水を採り來り、之を越過して之を貯蔵（其五）。

ン療法が行はれた。それも當時の最新ツベルタリン液で、原液一乃至二萬倍稀釋液の十分の一cc位から注射を始め、漸進的増量して不良なる反應現はれざる限り、五乃至七日毎に注射を持続し、結局は原液にまで達するのであつた。然し原液を注射するに至るまで長期間在するものはない、退院後も注射するものはあつても、なか／＼そこまで増量し得たものは曾て一人もなかつた。然し中にのは二年も三年も入院療養を受けたも

測定し、之を統計し、其五一〇を毎日又は隔日に、私をして結核患者の皮下(背部)に注射せしめられたことがあつた。これによりて最初の兩三人中、メギーと體重が増量し、栄養状態が佳良となり、其他の一般状態もそれに準じて良好であつた。そこでこれはまた妙だといふので更に多く之患者に注射療法を行つた。然るに必ずしも各人に良好といふ課に参ららず、體重の増加せぬもあれば、中には即ち滅したるものあつた。此の減じた患者が重症結核であつた

らであつた。されば先生も、常に杏雲堂外來に於て一々喉頭検査を御自身でなされたものである。

私は大學にて岡田先生の助手を勤むる外に、毎週日曜日（先生の診察室日の一日）には杏雲堂の外来診察室を訪問し、傍観生として私は先生の背後に立ちて、其の診察法を見學した。先生は時折、適當なる病變を有する患者があると、私に向つて、君こゝに水泡音があるからと、此患君にはこゝに捻髪音が聽こえるとか、これが氣管音だとか、これをSchwachendes Atemenなどと云ふとか、かういふのと Verschärftes verschwaches Atmenとか、unbestimmtes schwaches Atmenとか、私の活動する度毎に、何

申され別の腰掛を與へられた。これは言ふまでもなく、先生が私を指導せらるゝ厚意眞情に外ならぬのであつた。

態度が變らなかつた。しかひ助手連
は交代にて晝餐を取つたものであつ
た。これも今日仄聞するに大學教授
時代の先生の態度と全く同一にて、

首が略ぼ的に越かつたと。

試験的穿刺を行ふにも、先生自ら局處痙攣をなされ、針の持ち方から針のきし方、深さ、液の肉眼的性質、液の分量など一々實地に教へられた。先生が大學教授當時にも親切丁寧であつたと言ふことを、今日聽き知りて、今更ながら先生の心境が偲ばれて、私は感慨無量を覺ゆるものである。

少しも變りぬやうに思はれる。
明治三十六年のことであつた。落合直文氏が本郷浅草町の邸にありて病臥せらる
れし折、私は興謝野寛氏から依頼をうけ、佐々木先生の出世を乞ひ、私も同伴して
病床に陪席した。

ことは、巽口同音といつたやうに「先生病氣は全快いたしませうか」と云ふ事であつた。之に對して先生曰く「全快するかせぬか、まあやつて見れことにには分らぬ」。之が先生の外來患者で豫後に對する言葉であつた。然るに落合氏の場合は先生は即座に二三週間と斷言せられたので、當時の私としては、門人同様に其に大いに驚いたものであつた。然るに果せらるかな、落合氏は其後三週間を経過して

入念な診断・處方

endoes Atmen so leicht nicht, kaum und
Sehr verschwommenes Atmen
aber, unbestimmtes schwaches At-
men —が、私の通勤する度毎に、何
か必ず教えて下さればよ
温性肺膜炎、患者があると、先生
は背面の打診に當りて、必ず先づ健
康側の打診をなし、上方より漸次下
方へ叩打して肺音の下界を定め、そ
こに赤鉛筆を以て横線を划くし、次
に、患側を上方より叩打し下りて、
こゝにも赤鉛筆を以て横線を划くし、更に冷靜に兩側を打診して濁
音の存否、抵抗感覚の有無強弱を比
較吟味し、濁音の上界を決定せらる
るのが常であった。如何に外来患者
が多くアトに控へて居ても悠々せま
らず、必ずかくして精密に診察して
確診を期せられた。而して私に教へ
る意味に於て、其患者を私に示し、
「君今一度打診して見て呉れ給へ」と

當時杏雲堂本院には、古き助手として薬順平治君があつた。同君は苦學力行の熱心家で、承き體験から先生の從來の方式につき萬事心得たるため、先生には同君を非常に重寶がられ、葉は如此場合には如何此用意をしたもじだと屢々きかされた。

君も亦先生には絶對心服して眞の股肱であつた。先生の代診として缺くべからざる第一人者であつた。従つて君は杏雲堂門下の池谷榮次郎、池谷豊吉、板垣千一、内野倉明、篠川純一氏等と共に東京市内に於ける當時の開業醫中流行兒の一人であつた。

明治三十六年私が杏雲堂外來診察を傍観する頃には、以前に比して患者數は減少した方であつたが、それでもまだ午後二時か時には四時までかゝり漸く診察が終了した。此間先生は唯紅茶一杯を診察室にて召し上るのみで泰然自若の診察振りを持續せられ、診察最初と最終と少しも

にて直に喉頭発炎を行はれた。診察終りて別室に引きあけられた。こには奥謝野氏を始め二三人の門弟が集まり、先生に向つて、荷名之後につき尋ねるのみであった。私は傍へあつて聽いてゐた。肺及び喉頭結核にて重疾である。折角出診したれどこの分にては甚だ御氣の毒ながら今後二三週間位しか持つまいと先生は語られた。當時私は卒業の翌年のことにて、先生の往診診察を始めて御観し随分丁寧になさる方だと深く感じた。

其後、諸君生物教の後、奥謝野氏からの方話によれば、佐々木先生の一首に家族も門人も大いに驚き、そんなことをこのと遠方の御誠を呼んだ。三人寄れば河とやらで發議するものであつて、然らば大學教授の某博士に今一度診察を乞ふべきにあらずやとの説に從て診察をうけた。

然るに、さう聞く事はない。まだ一ヶ月や二ヶ月は特によと博士から云はれ、然らばとて遠方の人は何れも歸國した。すると急に悪化して再び通知するやら何やらで、大いに狼狽したことのこと。而しこよと謝野氏の言に、やはり佐々木先生の豫

三日目に黄疸の客となられる。
入念な診断・處方
先生は外来診察に於て、助手をして喀痰なり、大便なり、小便なりの検査を行はしめ、助手が鏡検の結果を報告しても、自分自ら試験管を手に擎られぞき、自分自ら試験管を手に擎られざれば納得出来ぬ程、そり程診断には良く注意を拂はれた。ヤツトの事で顯微鏡下に、唯だ一疋の結核菌、又は唯た一個の蟲卵のみを検出して、之を先生に報告すると、先生は自ら之を見て人に誤りと云ふことがあるから、今一つ検出せよとか、或は尙ほ再検を要すとか申されて、なかなか容易に承認せられぬ事もあつた。さうしてこの同じ事を反覆して幾回か申さるゝのが常であつた。
かういふ入念な診断法に終始せらるゝ先生な事が故に、我々が診断して敗性氣管炎なりとして入院せ

續文獻卷之三

卷之三

卷之三

といふ譯でなく、いつも軽症のみに試みたのであつたのに、成績は一様でなかつた。従つて此療法も一年位にて停止せらるゝに至つた。

先生は新薬を用ひるが全くおなじく思ふに新薬を用ゆることが好きであつた。個々の結核雑誌に於て解説薬鑑評薬又は結核に有効なりと發表せらるゝものは、想

々注文して取り寄せられた。ヨシ田氏の
新新ツベルクリンとか、アルモレツツ氏
のツベルクリンとか、色々の血清などが
届出した時代であった。ビラミドン、マ
レソントリゾールガン、カルミナールの
如きもそれではある。

精生の筆による見本を色々取らせて、
は、草局主任に質問したり、研究せしめられたりしてゐた。當時新薬は概ね場外
より舶來せしもののふであつた。

先生はアトモシール注射療法有効
結核患者に實施され、其良否に成績を
記められて、從て此注射療法は齊雲堂
にて承り粗経せられた。恐らくは今日にて
も適當な之の患者に實績せしものであつ

明治四十年頃、森雲堂向窓賣の柳橋芭
清樓上に聞かれ、例の如く略去し、紅葉
連も同地第一流ばかり集められた。主客
共に皆な弘の先輩、大七歳で五歳の。第

上先生は酒数筋の後、やがて胸熱となつて、またやうであつたが、やをひ巨蟹を起して、逐次各自の前に座し、献爵戴せんとて巡回せられた。井上博士(善次郎)の前に來り、始めて好機嫌にて酬酌しつゝ、笑ひ湛へ、戲に謂つて曰く、「君に『井上』なかなか馳服するさうだが、結核の事だけは僕は君にまかねよと、笑ひつゝ更に一

珍らしきお小言

先生は毎週一回(月金)必ず分院へ出張せられた。平塚驛へ着車の時間の一一定せる如くに、常に時刻は一定してをつた。時として其日横濱に途中下車して病家へ出診するとか、或は其臨大磯まで出診せらるゝ時は前以て電報にて豫告があつた。いつも夕刻着塚せられ、一泊して翌日午前中に入院患者を診察し晩食をして、帰國午後より外来患者を診て夕刻歸京せらるゝのであつた。然し外來診察は一週一回にすぎなかつた。

着塚の晩は分院の醫局長が、先生の宅に伺候し、留守中の入院患者の病況につき報告し、翌日診察後には副院長なる私が伺候して先生より患者の現況、豫後につき注意を拜承し更に今後の處置療法につき指示を受くる規定であつた。

私が平塚分院へ赴任して、まだ幾月もたぬ頃(明治三十七年二月三日)或ひ先生の回診後、例の如くに御住宅の大廣間に至り、先生から療法につき其方針を示され、私が謹みて傾聽するうちに、食事の仕度が出来、

先生は床の間を後に大食卓の前に大躍坐をかき、白布の涎掛をつけ、陽光の明るき室の中央にて、一献召しあがりて上機嫌となられた。さる程に私に向つて申さるゝやう、「喉結核には如何したらよいかな」と。私は即座に臆向もなく、大學では重曹水の吸入をやらせますから、それをやつたらと言ひ出した。然るに先生は俄に不興となり、「ソンナ事ハ問題チヤナイ」と。私は之はしたないと想ひ、直に申し上げた。それからメントー・オレーフ油を注入いたしましたと、先生更に聲を勵まして「ソンナモノデ治ルト思フカ」と。此時の先生の朝暮は私の忘れ得ぬものである。しかし當時の大學生喉嚨科にては、實際に潰瘍であれば其局處を乳酸で焼く位であつた。而も入院はせしめず、増悪すれば患者が結局通院しなくなり、助手も先生も経過の良否につきては餘り深く注意する處なく、其場限りの診療であつた。それが一題、先生も新學士も主任教授の爲す事が呪一最良の方法と信じたものである。當時私も其一人で、平然とうつかり述べたものである。

至るも尙ほ忘れられぬ。

或暁私は醫局長の代りに、先生の宅に伺候した。先生は此日出張の途中、何れかへ往診なされて例よりは晩く平塚へ参られた。一見何なく上機嫌であつて、座敷の廣間に洋服を脱きながら朱顔に微笑を湛へて話さうやうには君、困つたよ、略血癌者の所へ往診して脚部だけを診察して聽診器を戒めんとしたら、家族のものが嘆願して、主人公が病人の背面を診て呉れといふから、診まいと思つたが、先まりあつてないな。それではと背中を見ようと横にしたら、俄に大咳血をやつてね、そのままでニヨリ窒息して仕立つたよ。一寸固つたよ」と咲笑して語り終られた。恐らく先生としては近年にも、いつにもかゝるためしにかかるべく、久方振りにて引導を渡されたことと思つた。

烈火の立腹

明治三十八九年の秋のことである。入院患者の某氏の所へ、お見舞が出来た。其點は明確ならざるもの。三浦守治先生が平塚へ見送られた。何れ診察なされたものと見え、分院の玄關に來たり、當局の者に面會いたしたいと云はれたので、玄關子は同先生を應接間に招じ、私を迎へに來た。私は慇懃に挨拶し、お茶を供へ、御用件を伺つた。すると三浦先生には、特等別室に入院治療中の某氏が胸痛を訴へるやうだが、あの部位は肋膜が癒着して、爲めに血液の循環が害せられ、結締織の増殖を來たし、肋膜肥厚状態を呈するのである。

る。これに向て發泡膏を貼して貰つたら、よろしからうと思ひますかと、

三浦先生は例の眼珠を斜め上方にむけ、首を少しく傾けて話さるので

あつた。そんなことは當院として屢々施し來りつゝある所ですと申し上げたいけれど、私としては敬意を失するのに、私は唯だ承知いたしま

したの一言を答へたため、同先生には直に満足して引きとられたことがあつた。その翌日院長の廻診がす

み、例によつて院長宅へ伺候した。色々療法處置に關してお話しのすんであとで、實は昨日三浦守治先生が見え、某患者に對しシカくの話がありましたと申上げたるに、院長には「されど君は何と答へたか。そん

なことは我輩の疾くに行ひつゝある所だと何故言はなかつたか」と、少し御不満の色を久方振りにて私は拜したことがあつた。實際慢性肋膜肺炎状態を呈する部位に疼痛を訴ふる場合、手掌大的強発泡膏を貼すれば疼痛は消失する。これは杏雲堂にて経験済みのことであつた。

其頃群馬縣の或る富翁にて、先生と特別に懇意なる病家があつた。彼は當時より數年前のことでありしが、東京駿河臺なる先生の御本宅に特別診察を要くるために上京し、診察最中に大咯血を來た。之れを聽いた院長に、此時ばかりは烈火の如く怒り聲を勵して曰く「誰にでも好きな者に諂ひてもらひ。併し退院して診察をうけるがよい。此旨シカと申し傳へ」

次回の院長廻診日には、多少熱も下り、筋膜炎かに平塚海岸へ轉地療養中、園らずを勝手ノスにかかり、分院の隔離室に收容せられた。病期はいよいよ絶頂に達し、熱潮は毎日三十九度以上に稽留した日と歸へる日と、二回宛延診せられた。かく苦心盡力せられてもチフスの親盛人にカムツルの皮下注射を行はれ、院長も心配のあまり特別扱ひにて平塚へ着た。かく苦心盡力せられてもチフスの親過は遠慮なく進行し、結局此場合豫後未定といふ外なく、素人の考ふるやうに必ず癒るか、所詮愈らぬか斷言し能はざる場合となるに至つた。患家が心配され難かる程、喰けば喰び程、醫師として萬全の方便、則ち豫後は受合へぬと云ふ外なれば、此場合は人事を盡して天命をまつといふそれであつた。

然るに或る日のこと、患者の父は親心の悲しみ心細さ、豫後受合へぬときくからには死の宣告も同様と感じたものが、分院事務長を訪問して、ドレモ死するものなら、生前に東京なる某先生大學教授に一同診察を受けさせたいが如何のものにぞと、懇請し來つた。事務長は病勢の如何につきては何等の知識もないから、患家の音を其體に、院長へ取次いだ。本院病棟の長き廊下でもさうした體験が一二回あつた。此歩行振りは先生が必ずしも老境に入つた爲めと之れを聽いた院長に、此時ばかりは烈火の如く怒り聲を勵して曰く「誰にでも好きな者に諂ひてもらひ。併し退院して診察をうけるがよい。此旨シカと申し傳へ」

之れを聽いた院長に、此時ばかりは烈火の如く怒り聲を勵して曰く「誰にでも好き

なるに彼の一人娘が、時尖カタールか、筋膜炎かに平塚海岸へ轉地療養中、良識も出でや、良好の経過といふべきであつた。それより日を遡るて軽快し、遂に余快して退院すべく至つた。

先生と共に廻診する時、廊下又は分院庭内を歩くに多くは後方に附き时々先生の肩にて押されたり、又はヨウレンとぶつかられることかあります。其爲め貧弱なる自分は曾て平塚分院の特別室へ處々に孤立せる一軒建病室へ廻診の際、狭き坂の道路などで路傍へようけたこともあつた。爾來人いに注意する事にした。

本院病棟の長き廊下でもさうした先生が必ずしも老境に入つた爲めと之れを聽いた院長に、此時ばかりは烈火の如く怒り聲を勵して曰く「誰にでも好きな者に諂ひてもらひ。併し退院して診察をうけるがよい。此旨シカと申し傳へ」

之れを聽いた院長に、此時ばかりは烈火の如く怒り聲を勵して曰く「誰にでも好きな者に諂ひてもらひ。併し退院して診察をうけるがよい。此旨シカと申し傳へ」

之れを聽いた院長に、此時ばかりは烈火の如く怒り聲を勵して曰く「誰にでも好き

家庭に於ける先生

先生には唯だ一つ恐いものがあつた。それは養父の東洋先生である。

眞の親子ではないとしても、眞の従兄弟なる関係であつたのに、峻嚴なる東洋先生の前には絶対服從で、常に鞠躬如として前進せられ、閑々如として挨拶せられ、興堂先生の純真無垢なる情を言行に示された。時としては東洋先生と對談の折、あまりに率直に自己の所信抱説を開陳し、事物ありのまゝを以て返答せらるゝので、傍聴する令嬢芳子夫人をしてハラ／＼せしめた事もありと仄聞した。しかしそこは、萬事に注意深き、萬人に均しく親切なる、近世稀に見る賢婦人なる芳子夫人によりて圓満に愉快に斡旋され、常に春風驅蕩の雰圍氣が、家庭に満ちてゐる。

東洋先生も芳子夫人には全幅の信赖を寄せられ、興堂を生む方子夫人には家政も仕務も一切全部打ち任かれてゐてゐるにやうであつた。而して興堂先生は全力を傾げ醫學治術のみに捧げられ、たゞさへ他の人の授業質疑、若くは佛事には缺席しても、未だ曾て一日なりとも病院の勤務、患者の診察を缺かされたことはない。先生は實に自己の天職を極めて忠實に、眞剣に、完全に果さんと欲し、また實際に果されたものと、私は信する。

先生は極めて親孝行であつた。毎年元旦には必ず筆耕を新たにして年

賀状を認め、熱海なる東洋先生へ差し出された。其文句は年々極つてゐるのですよと、一寸首を引く恰好で笑顔をなつゝ芳子夫人が私に語られた。而して先生が執筆せらるゝのは一年一回唯だ此時のみなりと申された。先生は一月中更に日を選びて熱海へ出張し、東洋先生へ年賀を言上し、一兩日逗留して歸京せらるゝのが常であつた。當時熱海遠行くには、半日以上もかかり、天候あしき時は人車不通ともなつた。

東洋先生が徹底して、常に暗黙の了解で、あらゆる處置をなされ、歸宅後も常に心配の情を物語られた。東洋先生の晩年には、大森山王の別墅を修築し、熱海から移転を圖られたのも先生孝心の發露であつた。

の病氣を肺結核だと詮ひふらしてゐる。あれは結核にあらずして、喘鳴だ。君等も結核と思ひこんでるだらう。決してきような病氣ではな云々。東洋先生が八十の遐寿に躋んでられたのも決して偶然でないと思ふ。或夏の日のことである。私の平家時代先生には分院の回診を終りて住家へ歸られ、白の浴衣一枚にて廣間の中央に腰を下し、四角の人形アーテルにして、山海の珍味と寒涷などトルとに寝食が妨められて、豐滿の頬面に朱を塗へ、眼光少しく際曠ならんかと思はれ

先生の趣味娛樂

先生は健啖家で且つ健康者であった。私は平塚時代、則ち先生の五
十歳以後に於ける午餐、若くは晚餐の食卓を長年傍観したが、大なるア
ーバル上には、いつも千種にらかき料理が陳列せられ、それを悉く食べ
盡されるとは云はざるもの、見るからに先生は能く召し上がる方だと思は
れた。その上先生は晩年麥酒を飲用せられた。冬は氷の代りにお湯が使用
せられ、夏は特殊の桶に水を盛りて坐右に備へ、それに麥酒瓶が渡され
てゐた。冬は氷の代りにお湯が使用せられ、麥酒を少しく温めて飲用せら
るゝのが、中年以後の習慣であつた。一度先生の便々たる腹壁を見た
ものには、その健啖を想像するに難くないであらう。

先生は元來酒豪といふ程でなくとも、酒好きであつたやうに思ふ。大き
きなる往診砲の中には、聽診器の外に、獨逸醫學雑誌もあれば、ドロウ

やうに、中田君も私も、さては事務員も、總ての人が先生を殺されたものであつたといへる。

先生は父母に孝に、同胞に友に、而して夫婦相和するのみでなく、親戚故舊に恩恵を施し、學生を愛育養成し、一時多數に及んだものであつた。富寺耕一、同卓爾、佐々廉平、同貫之、宮本博士、中田雄二等の諸博士は何れも皆子弟ひの門弟である。之等の方々には、異なれる時代と異なる場面とに於て、それなりに種々なる異なる絶妙の追憶すべきものあらんと思ふ。

バスの瓶もあり、日本酒の瓶もあつたことを私は知つてゐる。私が極めて健康であられたことは、杏雲堂出入するもの、周よく知る所である。私の知れる範圍に於て、五十歳以後の先生が病氣のため病院勤務を休まれたことは、全く云はざるもの、殆どなかつたといふべきであらう。私の記憶に存しないからである。但し感冒位にはかられたことはあつた。先生自宅にて吸入をなされたのを見たことがあつた。また私に向つて咽喉を診て呉れと云はれ、ルコール(加石灰蒸水)液を薦めして呉れと云はれただしがある。翌日再び私に診て呉れと云はれながら私はそれから私に直ちにルコール液を用意して住宅へ参上し、昨日の如く拿布し上げんとしたるに、先生答へ改めて申さる。やうに「凡て病氣は一日よ二日診た上で、それから處置すべきものだ。君のやうに珍ねうちかる直に塗布するなどすることに間違つてゐる」と、一本きめつけられたことを記憶する。しかし先生が院務を納められた記憶はない。

先生が健康を維持せられた原因の一つは、生來真大にして健健康なる體質であつたことと、他の一つは日常生活に無理をなさぬことであつたと思ふ。先生の境遇は私の知れる限りでは、精神的にも、肉體的にも無理をしないで済んだのである。尤も先生が五十歳以前大學教授時代には

夜分も可なりおそく迄勉強なされ、其間も可なり多忙なもしため、勢ひ過勞せられた事はあつたと思ふ。けれども大學辭職後の先生は、吾々一般開業醫と異なりて、診察時間には制限があり、夜間往診の苦労はなし。家庭務は一切擧げて、賢夫人にお任せになり、先生は社交を嫌ひ、唯だ讀書と診察のみを事させられたれば、非衛生的な生活、若くは、發病を誘致する如き動機がら自然遠かることになつたと信ぜられる。唯に空氣傳染による輕微の流感のみは先生と雖も如何とも致し方にはなかつたであらう。

先生の長き生涯の前半は、其精力の九分九厘を學問に傾けられ、後半は其九分を學問、其餘の二分を娛樂に費された。やうである。學問は主として醫學であり、傍も漢英語であった。娛樂には色々あつた。歌劇、開基、諺曲、作詩、習字、散歩などである。

新派俳優の大立物、高田實の存命中には、毎年四月の都度、先生は家族一同と共に観劇せられた。私も度々お供したものであつた。特に晶風なさる際でもなかつたが、高田の「トボ一式」にはいたく感心せられ、笑ひながら彼の技能を腹藝として稱揚せられたため、閉幕後には彼の細君お瀬さんが彼と共に本郷座の芝居茶屋の二階の先生の前へ挨拶に來たものであつた。舊劇の歌舞伎座へも亦、私は度々お供をした。しかしこの方はまだ役者の名を見た。參會者の數は大抵三十名

先生は喜んで文子女史に就いて開基と學ばれた。明治三十九年頃より關東震災直前まで、毎週一回二、三時間位づゝ稽古せられた。而して結局初段に對して井目をおさ離れて決せるとする位までに進歩せられた。文子女史一談によれば、先生は、上述して強くならんが爲めに稽古なるにあらず、開基の邊によりて稽古がすむや否や大路を發して「モセられた。」と令夫人へ呼びかけられ、如何にも子供らしきお氣持である。其れ故勝負の如何などは、あまりお氣にとめられなかつたようである。事務長の川村老人と相對して闘はれる様子を傍観せしに、いつの間にか基有の現況がかなり妙なことに白のあるべき處に黒があつて、最初何れが自を持たれたのか分らなくなつたことが度々あらまして詭妙な幕になり、お互に大笑にならねまつた。先生の好敵手は秀一先生(佐々木)かと思ひます云云。

先生は喜多六平太氏に就いて諺曲の稽古もなされた。どの位上達せられたか、共に觀劇せられた。私も度々お供したものであつた。特に晶風なさる際でもなかつたが、高田の「トボ一式」にはいたく感心せられ、笑ひながら彼の技能を腹藝として稱揚せられたため、閉幕後には彼の細君お瀬さんが彼と共に本郷座の芝居茶屋の二階の先生の前へ挨拶に來たものであつた。舊劇の歌舞伎座へも亦、私は度々お供をした。しかしこの方はまだ役者の名を見た。參會者の數は大抵三十名

なかおすぎである。自分も嫁ひではな

い。然るに晚酌後のことであるから、

自分はいつも暗室内に入りや否や、直

に居眠りを始め、よい気持ちとなつて

義塾するが、やうにうらに、打ち

出しとなる。そこで懶いてお隣りの先

生はと見るに、これは何んとまあ、自

分以上に心地よげに居眠りの熟睡だ。

先生と云ひつゝ肩を叩くと、川村ドウ

ンキと仰せられる、ドウしたんではな

い、もう済んだのでと云ふと、さう

かと互ひに顔見合せて笑ひながら外出

する。それが又毎晩ですよ。

と川村氏が大笑しての土産話である。

謝恩會と同窓會

明治二十四年頃、先生がツベルクリン取調の官命にて再度の洋行を

起して、歸朝せられた折、當時の杏雲堂管員任川純一及び板垣亨兩氏の發

果として三浦謹之助博士の申さる、位が、

これが基因となり、杏雲堂同窓會な

るもののが出来、爾來大正年間まで、

年未年始に此會が開催せられた。創

立當初平年の會は東洋先生の招待、

年始の會は門人同窓より謝恩の會と

いふことであつた。其後興堂先生の

時代になつて一年一回となつた。

明治三十六年以後、私の知れる同

窓會に於ては、常任幹事として當時

市内にて流行家の板垣寧、池谷豐吉、

佐々木森男氏等が幹旋し、案内狀を

發して先生を招待する場合には、金

杉英五郎、朝倉文三、土田卯三郎、

鎌木主計、須田卓爾、井上善次郎等

諸博士及池谷榮次郎、並川純等の署

名を見た。參會者の數は大抵二十名

以上五十名位が普通であつたが、薩摩興學士の歐州留學送別會は特別盛大で出席者百名以上であつたと記憶する。席定ると佳例によりて、金杉博士が起りて開會の趣旨を述べ、先生は之れに答辭を述べられたものである。而して綺羅星の如くに馬蹄形をなして着席し、柳橋不一流の紅袖連と相對したる光景は夢の如くに思われる。かくていつも安靜となるや、先生は首席を去りて各列席者の前に進み、一々酒杯を擧て相酌めし、頗る上機嫌にて且つ談じ且つ飲まれたものだ。朱顔の先生、巨體の先生、明朗にして一種セビイある音聲の先生は獨り酒宴の場を壓し、一談一笑毎に注目仰的となつたものである。

興に乗すれば先生いつまでも酣酌をつづけて歸へるを忘れ、談笑に時を忘れるゝ傾きあるを以て、いつも板垣氏が氣轉をきかせ、時刻を見計りて歸宅を促し、人力車の用意が出来た旨と告ぐるのであつた。これら光景は三十餘年後の今日に至るも尚ほ髣髴として忘る能はざるものである。

先生が杏雲堂を隠退せられてから同窓會は自然消滅し、それに類する甲辰會なるものはないが、全くなつた。其時、先生は自ら一書を認めた。其時、先生は自ら一書を認めた。

明治四十三年秋、私は杏雲堂、即ち佐々木先生の恩師により獨逸へ留學することになつた。其時、先生は自ら一書を認めた。

め、日本画幅一隻に添えて、ストラスブルグ大學病理學教室のレツクリングハウゼン教授に渡すべく私に托された。同教授は其者先生の恩師であつたため、此機會に贈物を呈された譯である。私は海路佛國マルセイユに上陸し、獨逸フライブルクに着し、有澤博士（現在大阪開業眼科醫）の厚意によりて、宿所フラク・ドクター・チッキンガル方（これに宮下左右輔博士の以前宿せし所）へ落ち着くや聞もな（ストラスブルグ大學に教授を訪問した。然るに教授は病氣の故を以て久しく出勤なしと聞き、病理教室へ托して其儘フライブルクへ帰還した。其後幾日かを經て私は九大教授田原博士の紹介状を持参してアショウ教授を訪問した。これは病理教室に入りて研究の目的であった。然るに其時ア教授はストラスブルグへ旅行して留守であつた。後日ア教授より聞い處によれば、彼はレツクリング博士の研究室に入りて研究の目的であつた。然るに其時ア教授はストラスブルグへ旅行して留守であつた。後日ア教授

大正十四年は先生が満七十歳の壽齡に躋られるので、其前年先生の門下生相寄り、相胥り、杏雲堂關係の有志諸君の賛同を得て、先生の壽像に同門の人なりしことを知りて、私は此旨を先生へ報告したことがあつた。ア教授は佐々木先生も時代こそ異なれ、共に同門の人なりしことを知りて、私は此旨を先生へ報告したことがあつた。

大正二年四月、私は獨逸留學より歸朝して、挨拶のために先生を訪問した。其時、
「お尋ねのあつたあとに、喉頭粘膜の治療について、何か新らしき方法を學んだかと私に尋ねられた。そこでは新らしきことと申せば、嚥下痛に到する注射療法で、患側の上喉頭神經にアルコールを注射して鎮痛の目的を達す方法である」と答へた。

すると先生は即座に、「なんだそれはホーフマンの報告した方法ぢやないかと申された。私は内心驚いた。私の渡獨は西暦一九一〇年であつて、當時我國では未だ何人も喉頭結核に對して、此アルコール注射療法を實行してゐるものはなかつた。從つて私も其方法を知らなかつたのである。私が歸朝したのは一九一三年三月である。ホーフマンの發表は一九〇八年であります。ヨーロッパの醫事週報に始めて報告せられたのである。それ丈分先生は常に獨逸の醫學雑誌に目を通し、新治療法につき常に注意を怠らなかつたのである。

古稀壽懲除幕式

大正十四年は先生が満七十歳の壽齡に躋られるので、其前年先生の門下生相寄り、相胥り、杏雲堂關係の有志諸君の賛同を得て、先生の壽像に同門の人なりしことを知りて、私は此旨を先生へ報告したことがあつた。ア教授は佐々木先生も時代こそ異なれ、共に同門の人なりしことを知りて、私は此旨を先生へ報告したことがあつた。

大正二年四月、私は獨逸留學より歸朝して、挨拶のために先生を訪問した。其時、
「お尋ねのあつたあとに、喉頭粘膜の治療について、何か新らしき方法を學んだかと私に尋ねられた。そこでは新らしきことと申せば、嚥下痛に到する注射療法で、患側の上喉頭神經にアルコールを注射して鎮痛の目的を達す方法である」と答へた。

かくて同年十月十八日平塚分院玄關前の廣場の一角に胸像が建設せらる。私は新らしきことと申せば、嚥下痛に到する注射療法で、患側の上喉頭神經にアルコールを注射して鎮痛の目的を達す方法である」と答へた。

私は先生の私的方面に於て香々に興へられたる教化の點、感化の點につき所

して且つ碧、平塚沿岸の松林は、當年何れも姫小松なりしも今ではそれより三十年の星霜を経て綠も濃き大木となり、病室より座ながらにして岸うつ波の奔騰を目撃し得ざる程になりました。此日來會者は百五十餘名に達し、佐々木森男學士（前副院長）が司會者となり開會の式辭を述べ、永野（重業）副院長が應務報告をなし、令孫佐々木洋興君（九歳）の手によりて、スルバードと降幕せられて拍手喝采が一時にこだました。

ブローダムに従つて第一席に金杉翁、神奈川縣中郡醫師會長等の祝辭博士の祝辭があつた。次に井上善次郎博士の祝辭があつた。後に井上善次郎博士、朝倉文三博士、池谷榮次郎翁、神奈川縣中郡醫師會長等の祝辭がます／＼圓熟されたことを拜するに付いて欣喜のあまり慶賀の意を表したいのと、先生の高風を永く後世に残し、先生創立の杏雲堂平塚分院庭内に於て常に其温容に接したいたの爲めであつた。

かくて同年十月十八日平塚分院玄關前の廣場の一角に胸像が建設せらる。私は新らしきことと申せば、嚥下痛に到する注射療法で、患側の上喉頭神經にアルコールを注射して鎮痛の目的を達す方法である」と答へた。

さて香々の先生の公的方面圓ち公人としての先生を頌讃すべき事柄、挨拶すれば我國に於ける歯床病學者の泰斗として最高學府に教鞭を執らせることの古き丈け、それ丈け多く我刀未界に盡されしことに付きては、先刻來諸先輩によりて充分に申説されました。

私は先生の私的方面に於て香々に興へられたる教化の點、感化の點につき所

感の一端を述べて感銘の意を表したい

と思ひます。

諸君御承知の通り、先生は安政二年十二月十一日の御誕生ですか、或は二月十四日に満七十歳となるります。今日の除幕式は、同時に古稀の賀であります。

先生は明治十二年、満二十四歳にて大學を御卒業になり、五年間獨逸に留学せられ、明治十八年御歸朝となり直に大學教授となられました。而して十九年には、嘗て私の義父である木村增太郎氏が別課を卒業してゐる。當時の別課生は何れも新に歸朝せられたる先生の嶄然なる學識を驚き且つ其の親切丁寧なる授業振りに感激したため、

先生の名跡は噴々として四海に鳴り響き、なほ田舎(下野鹿沼)にありて十五歳の時、已に先生の學識の深且つ厚なる事をかざげました。その佛教因縁話をして廻らせるなれば、此時已に私は先生に薦められてゐたことを記する。

明治二十九年、先生が結核療養所の必要を感じられ、地を相す所方に勿急せられ、結局この平塚海岸に決定せられし所以は、第一、海岸が南方に面し、且つ清潔なること。第二、空氣が新鮮にして且つ松林に富むこと。第三、地下水が清冷にして且つ地質が白砂にて乾燥せること。第四、人煙疎にしてシカモ東京よりの交通不便ならざること等が好條件であつたからと思はれます。私は此分院の建築最中に此地へ參つたことがあります、當時の寂寞たる光景は今猶ほ思ひ出されます。日没後は人里遠きために到底外出出来ぬ。見渡す限り暗黒で、松風の音が最も鳴

く聲か、若くは犬の遠吠か、狐狸の出没する異常の響きより外に聞くものはなかつた。時には先生の御住居へあやしき賊の忍び入りしこときへあつたと云ふ事であります。

今日こそ、此海岸に道路も出来、商店も出来、旅館も出来、多數の別荘も出来、人車、馬車、自動車まで往来するやうになりました。これは偏に杏雲堂分院設立せられたるお陰、換算すれば

先生の御恩澤によることと存じます。我国には今日こそ、到處の海岸に旅館所が出来まして、呼吸器病者は、自然療法の大福音に浴しつゝあります

が、當平塚海岸に當杏雲堂分院の出来る頃は、一般世間でも力挽世界でも、未だ空氣日光の應用、則ち氣候療法に注意せしものはありませんでした。先生

が、當杏雲堂分院を平塚海岸へ創立して、一晩間でも力挽世界でも、未だ空氣日光の應用、則ち氣候療法に注意せしものはありませんでした。先生

は、當杏雲堂分院を此平塚海岸に建設することには大いに意義あることと存じます。

私は更に進みて先生の德を敬慕し、先生の行を頌讃する意味に於て、僭越ながら先生の尊嚴につき申上げます。先生は常に温顔を以て人に接します、慇懃と諧和無窮。宛がら生れた時其體の偉大な才、功徳を想像せめます。

先生の御氣性は進取的か、保守的か、これは見方によりて進取的の處もあり、保守的の處もある。私が永年、先生に親交せる間の先生は、結構活潑といふ點には極めて進取的あり、世間通俗の社交には極めて保守的であつた。これ

は恐らくは、社交がお好きでないからだと思います。

吾々は常に先生を敬慕し、先生の長をとりて以て之に習ひ、先生の儒を學ぶ

以て之を譽はんと心掛けるも、先生の如くに出來ぬ聲が多々あります。先生

に出入約に達はず、寢食時を異にせず、名利を逐はず、偶せず、黨せず、人を咎めず、人を辭はず、中正にして道を行ふ方である。されば、之にて、先生の口から誰彼は偉人であり、傑物であると取り立てゝお頬めなされたことを私は遂に聽きたることもないと、而して

先生は東洋先生御夫婦、即ち御崩親に對して孝がを盡さること無類であると想す。先生は自ら勞ることをせず、自ら宣傳らしきことは未だ曾てなく、己を盡し、自ら守るといふ型のお方である。

昔仙臺の林子平は六無の歌をつくり、六無齊と號した。私尙に思ふに、我先生には、恐いもの無し、苦勞無し、父兄なき後は書くことも無し、されば三無齊といひたいたのであります。

吾々に右を見ても左を見てもまだく恐いものがある。世間にには自分の如君へ恐いものゝ一つにする人もある。

先生に於ては此等の恐いものも、苦勞も、書くことも無いのは、畢竟これ皆賢明なる芳子夫人があられるからである。内助の功の偉大なることを私は此際に申上げたい。先生をして今後も無病無災にして百年の壽を保たれん事を祈ります。かくて拙詩二首を呈した。

即是先生御老方。

杏林書宿古勝翁。
令德隆隊樂所榮。
個喜秋池今日會。
陪先生似坐春風。

かくて先生より謝辭があり、一同は、先生の萬歳を三唱して此の式を終つた。

故北村文淵翁の談によれば、佐々木先生が杏雲堂分院を平塚海岸へ創設せらるゝに當り、其資金三萬圓を

東洋先生より借用せられた。

この借用は父子の間でも只ではな

く、利息附きであり、且つ業務開始

後三年を経ても、收支償へざるに當するか、私達中學生として毎月金

五圓にて學費を貯ひしを以て見ても

生活程度から比較して思ひ半ばに過

ぐるものがある。而して創立當時あ

るの平塚海岸の山林小松原が坪當り五六十錢位と記憶したが、其後私の時

代明治三十七八年頃には六十五錢と

なり、更に四五圓ともなつた。現今

にては幾何なるか、坪當り拾圓から

拾五圓位に賣買せらるゝともきく。

先生の當時に於ける聲望手腕によ

り、入院患者は忽ち滿員となり、今

にては幾何なるか、坪當り拾圓から

拾五圓位に賣買せらるゝともきく。

院は次第に發展し、一戸建の特別室

を増築する盛況を見るに至つた。今

日にては設備萬端、更に充實發展し

て昔の面影は殆んど消えんとする盛

先生の往事に觸して私の提出せし色々
異なる人生と體氣の趣に惑ひを
患はれた。視力にも聽力にも他覺的には
差支なく感じられたが、附添看護婦に對
しては、從來になき程、薬葉が大にして
且つ嚴であつた。早くお茶を出せ、早く
お菓子を供せよなど、自ら命令をさる様
子が、本來の悠揚には少くも變なるやうに
思はれた。これ恐いは老境に入らぬた
爲めか、身體に不自由を運ぜられし爲め
か、それとも賢夫人に先立たれ孤獨の御
身となられし爲めか、兎に角數年前とは

の質問に對して、先生は老境に入つては物事を忘れ易くなり、また大方忘れはてたから連答が出来ぬなど申されたが、それでも往々當座井深に於ける江本冷灰博士一同欣々女史との交際に関する孰慮淡
かなさに、殊に女史もあのやうな非常最後を述べたが、今一度女史の寫真を見た、ものさあると話され、何と云ふ

昔懐かしき情懷の發露が偲ばれた。

恩師遐齡八十四。
頭髮戴雪半容界。
僕僕扶恃下堂行。
誰知曾是人中龍。
人生衰老自有期。
豐穎懷憶當年事。
山中年年送俗塵。

先生の御逝去

昭和十四年七月、先生は大森山王の寓居にて、例の如く廣間の中央に腰床をとらせ、日夜寝たり起きたりしてをられ、ラヂオ放送を唯一の樂しみとなし、世界の情勢や、日支事變の報道に耳を傾け、窃に一喜一憂を感じては來客に物語り居られた。同月七日多少感冒の氣味ありしとはいへ、未だ熱候はなかつた。

八日偶々今種洋興君(理學上)がいよく出征すといふことになつて來訪された。其折先生には腰巣より起きて、襖々たる洋興君の軍装を見

留り得なかつた。乃ち退きて先生發病前後の状況を家人につきて問ひ、それを悔にするにつけ、萬感交も交も至り、歸宅後もまた往事やら、去年の事やら、胸中より湧き起り浮びて來たり、あとからあと、それからそれと、一夜連續して追憶に耽つた。

り發熱し、十日には昏睡状態に陥り、十一日には其儘滯焉として遂に逝かせられた。病症は急性肺炎であつたが、昏睡と同時に四方へ通知せしめたため、親戚、知人、門弟等俄に相集るに至った。先生は平素申さるゝ様、「自分は今まで誰れの葬式にも代理を遣しながら、自分の葬式には他人様に御迷惑御足勞をかけぬよう、内輪丈けにて儀式をすませて呉れ」と、この遺言を尊重せられて、佐々木隆興博士は翌々十三日を下し、芝青松寺に於て厳かな葬儀を挙行せられ、然る後に於て始めて先生の逝去と葬儀の既済とを新聞紙に廣告せられた。

去年盛夏訪山房
親接音容上壽座
八十五齡增一夢
園魂何處月蒼蒼

慷慨憂時雄志存
病中氣別送麟孫
蘿露歇殘欲斷魂
三身通神後方聞

中元燈火蓮華表
中華萬代感恩長
日暮歸心急急急
通鑑感恩長

自門人拜影堂
頭白

杏林久仰丈人師
衷情極水香潭泉洞時
再見已無期
五

數香踏杏林
休忽失此名賢
拜靈壇
火因緣先洗硯
汎灑醜篇詩

若狭裳川翁の追想

先生の百日忌辰（昭和十四年十
月十八日）の法筵席上にて詩豪岩溪堂
川翁は先生を追憶して曰く、
「自分は興堂先生と同甲（八十五歳）であ
る。明治二十三年夏、輕井澤の江木屋旅
館の別荘に遊んだことがあつた。當時先生
は宮守耕一君（後に醫學博士）をお伴に
つれてお出でになり、江本別荘を見て、
大いにお氣に入り、仰自分にも此地に別

氣患者なら藥にいらぬ、水を飲ませることで快するもあるから」と申され、笑はもたらされた。或る時、近在から先生に往診を頼みに來たものがあつた。すると先生は「僕は一晩者ではあるが、此地へ避暑のため遊びに來たので、聽診器を持参せぬから診察は出来ぬ」とて斷はられた。

其翌日先生は車だ／＼「病人だ／＼」と家人に向つて仰せられ、これかに波多野さんへ往診すると申された。

自分は髪だと思って、先生に尋ねた。「昨日先生は聽診器がないから、診察出来ぬといはれたのに、今日はまた往診とは、どうなされた」と。先生申さるに「聽診器は醫師にとりて武士の刀も同様である。何處へ行くにも所持すべきものだ。遊びに來てる以上、知る者はまで診ることはしない。今日のは波多野兵吾郎君の令嬢で知ってるものがだ。それが病氣といふから、往つて診てやるのだ」と。先生の答には自分は全く敬服した。

佐々木先生は六十歳の時には、最早なり白髪になられた。自分はそれに戻して全く黒髪であつた。先生から君に染めゆるかと申された位で、六十三歳まで私は全く黒かつた。先生申さるに、「金をやるから其髪を交換せんか」と、自分は髪にいつもならんが、金丈けは下されば貰ひます」と云ふて大笑した事があつた。

先生は大森へ栖隱されてから、散歩好きとなられ、晴雨に拘らず、夕刻に必ずお出かけになつた。一日私が夜振りにて訪問すると、先生は足が痛んで困ると仰せられ、あまりに運動が過ぎたのだと申された。其時自分は三里位なら今でも樂に歩けると話したるに、先生曰く、「昔は頭髪を交換せんかと云つたが、今は専い

「下を交換せんか」と。傍にありてこれをきかれた奥さんなど一同大笑ひしたこともあつた。先生は謹厳であまり笑はれる方ではないが、岩渕が来ると笑ふことがあると皆さんで申された。

先生は物事に熱心でさつた。その質剣なるには驚く。お孫さんの順子さん、貞子さん、漢學を教へて呉れと申されなから、私が教へんとしたら、本が白文である私は之てはいかんと申上げたるに先生曰く、「返へり點せ、送り假名がある」と、それ計りあてにするから、力がつかぬ」と申され、白文のまゝ教へて呉れと申された。

先生が明治二十五年輕井澤より東京へ歸へられし時、自分は先生の漢詩の話、子類の話などを、毎週一回死することに約束した。或る時、先生は申さるに、「詩は悲觀的の物なり」と。そこを自分は説明した。富貴の愁や、離詩や、結婚の詩は自出度き物と云ふを當然と思ふ。其當然で、云詩は、人の陽氣を云ふからである。悲悼とか、友を哭すとか、世を愛すとかは人の陰氣を云ふものである。月は陽のもの、月は陰のもの、陽に向つて泣き哀しむものながるべく、月に向つて憂ひ悲しみ、感じて泣くものある諷なり。先生の身分より申せば、富貴なるものは自觀なり。世の事は千差萬別で、他觀も亦世故を知るべきである。少しは詩を作られては如何」と申したるに、先生曰く、「古人も云つた、書は萬巻を讀み破り、筆を下す神ありと、杜甫なりしか、我も三年飛はず鳴かすだ、飛且鳴けば人を驚かさんとす」との意氣にて先生は感服つて居られた。

觀をしてゐる。これ皆先生の餘光といふ外はない。

晩年の新春と盛夏

昭和八年一月某日、私は年賀言上のために、先生を訪問した。先生は當年七十九歳となられ、鶴髪童顔であるが、頭髪は大分稀薄となられたやうだ。顔色は相變らず、桃色で光澤を帯び、頬部は豊満で輪影を止めず、音壁は一種サビのある獨持の調子である。和服の着流して、羽織を着し、黒帽の大テーフルを中心にして、東南向きの客間に、床の間を背にして、ドツカと安坐せられた先生に面接したのである。こゝは大森山王の閑居である。

相變つて御隨處にお見受け申上げ
され懲懾至極に存するこの私よりの
質訓に對して先生の接觸が面白い。
一年を重ねると共に、身體、精神、老衰
し、收退し、氣力共に減弱せる。毛髮は
薄くなり、齒牙は落て、聽力は難となり、
視力を衰へ、記憶力を減ずる。所詮貴方
のやうには參るらぬ。新年を迎へて歳と
ることは一向に芽出度くない。

昨年夏のことである。一日朝起きたよ
せしに、起きられなかつた。こいつはよ
く上腹潰瘍が來たかと思つた。しかし言
語も出來れば、下足も動く。但し如何と
しても起つことが出来ぬ。因て其儘就
寝することになつた。そこでさては何病
かと思ひながら、色々と書籍を研索し
てみたところ、結局 *Hyposthenic Pseudo-
paralytic* と分かり、安静にすれば次第

と當時の模様を語られた。かかる懇話は私にとりて稀であつた。先生はやゝありて更に語られた。

先生は昭和九年十二月、家庭の中
心人物たる令夫人・内政外交、通信
大藏ともいふべき萬端の事務を一身

生に於て私は、おやによつて、先生にはます／＼御健康にて、來年は八十歳の賀を送ばさん／＼と申し述べた。此時同行の河合龜太郎博士は傍にあつて、唯だから／＼とうち笑ふのみであつた。芳子夫人も傍にあり、莞爾として眼を細くし、首を短くせられた。かうした態度が令夫人の平素の習慣にて、嬉しさ睦まじき私の表情であり、御満悦の表現である。私等は、老後をかくの如くにして暮したいこと思ひつゝ歸宅した。

ことが出来そ。普々同級で生きのこれるに即今二人である。其他は皆地下に逝いた。地下に入つて、ラヂオも通じまい。飛行機も見られまい。阿んとしても生ききすれば、それ丈け利益である。されば死にたが石にも及ぶまいではないか。云々。

昨年の暮に食物のために腹を害し、血便を排泄して。赤痢にては大變の困難な病で、下痢を服せしに、あまりに利きを過ぎた爲めか今度は下痢がとまらず、難谷君(専術)の診察をうけた。流動食のみにて、下痢せしため、始めて大いに弱りはてた。昨今漸くかゆみ食するまでになつたが、老人となりては伸々快復せぬ。何事も老いては駄目のものだらしかし病氣はしても長命することは損にあらず、益する處がある。長命なればこそ今日床の上にありて、居ながらうに、歐洲のことも分かり、國際聯盟のことにもおかる。上帝の苦勞と嘗てお口に

例に運は才、我流以て腰脚、不自由を覺えらる、二階の一室に横臥心ま、て懸接せられた。言語にも手蹠にも支障はない。

別子の一つにも屬する位舊き方なれば、自動車の運転手も、直ちにナウライといふ位よく知つてゐる。先生の別荘を何日かの間にか新築せられ、昔のバサツ、式家屋の面影に少しも存しなかつた。

有様は、先生として無上の愉快を喫せられたことと推察した。

昭和十三年夏八月の或日、私は久々にて先生を輕井澤の別墅に訪問した。三十数年前の輕井澤とは雲泥の相違にて、露天前後の東京市の變化にも類似せるやうに思はれた。佐々木利莊といへば地草

に引きうけ、先生をして少しも後顧の憂なからしめたる賢夫人（芳子様六十八歳）を亡はれ、其翌年七月には母堂峯子夫人（八十四歳）に死別せられ、大森山王の寓居は何となく俄に寂寥となり、先生の心中を自ら頗りに寂寥を感じられしこと諭所などから推察した。しかし當時隆興博士並に令間梨喜子夫人の慇懃なる介補、懇篤なる孝心によりて、此世ながらの極樂世界に、氣隨氣儘なる諒生を送られた。殊に令孫達の夫婦、相寄り集めて、先生を繞る一家團欒の

が往きたて時の話である。

先生が漢籍を讀まれたことは大したものであった。何しろ二十年間毎週一回づつ、自分と共に讀書せられた。史記、周禮、莊子など自分が講義しても、先生は随時に落ちぬと、なまく其辭さうかとは申されぬ。ソコはかりではないかと申されたこともあり、互に考へてから決定しませうと申したこともあつた。殊に先生は莊子にてきて疑問を發せらるゝことが多かつた。周禮がお好きで面白いと申されしと云ふ。

岩渕翁は身體も達者であり、辯舌も達者である。また知識も明晰であり、記憶も強精である。翁と相對すれば話柄多くして談數盡きず、況んぞ皆丈の久しきに涉るものあるに於てを以て、私が昨年夏興堂先生を輕井澤別墅に訪問して作りたる古詩を翁に示したるに、翁は一讀の後、詩人の立場より評すれば、二三加筆すべき點あれど、貴君の作として結構である、往年のこと追憶され、當時の冷灰博士歟々女史のことが偲ばれて面白しと申された。

伊澤多喜男氏の追憶談

同じ席上にて、伊澤多喜男（貴族院議員）氏は次の如くに讀書談を語みられた。

自分は今日の今まで、佐々木先生が興堂と號せられてゐた事を知らなかつた。

興堂先生は、自分の娘婦に當るので、自分は子供の時より興堂先生の世話をしなり、上の明治三十年七月自分が

先生が漢籍を讀まれたことは大したものであった。何しろ二十年間毎週一回づつ、自分と共に讀書せられた。史記、周

東洋先生（明治十四年は先生四十三歳）が申されぬ。ソコはかりではないかと申されたこともあり、互に考へてから決定しませうと申したこともあつた。殊に先生は莊子にてきて疑問を發せらるゝことが多かつた。周禮がお好きで面白いと申されしと云ふ。

大切にする家内を貰ふに當り先生は媒介者となられたので、私は一層離有り謝してゐる。

自分は明治十四年始めて上京した。山

東洋先生は病弱なりしたる駿河臺の佐々木舍へ歸國する方よろしくらん」と。そこ

で自分は明治十五年頃一其國元へ返へました。これが佐々木家に接觸の端緒であつた。これが佐々木家に接觸の端緒であつた。

自分は田舎にあって、健康回復せし

ため、明治十六年再び上京した。

此時須田草樹に同伴したのである。須田は自分

の従兄に當るからであつた。

自分は元來、無遊慮な人間で、他人の

迷惑を知らぬやうに入からは見ええ。

別荘を有する人が、それを使用せずに明か

しておいたり借りて用ひた方がよろ

しからうと考へ、時々輕井澤の佐々木別

荘へまわりました。熱海の別荘も、この

一方で借用して熱海へ行きました。暮

多大半な先生も、輕井澤の佐々木別荘に

て、宿泊したことあります。

熱海の佐々木別荘など、當時自分の別

荘の前を通過しても、何となく寂寥を感

じた。今後も最早其音容に接することは

永久に出でず、誠に残念に思はれる次第

であることを。

私は佐々木家へ長く出入し、先生

にも賢夫人にもいよくお世話を

なめらかに

思ふ。茶後先生の談話には、多喜男

は小粒なれどなまく氣が強くてや

り手であるとお賞めになつたことが

伊澤家との關係は今日始めて知るを

得た。伊澤氏が警視總監時代のころ

森男先生がつぎ神田駿河臺佐々木

東洋先生の後を、政吉先生がつがれ

た。而して政吉先生の後に隆興博士

が養嗣子として入られ、東洋先生の

後に秀一博士が養嗣として入られた

事つて秀一博士は幼少の頃より駿河

臺の佐々木家へ出入せられ、興堂先

生に關する追憶は、筆にしても口に

しても盡ぬものがあるであらう。因

て私は多忙なる秀一博士をして、今

嘆息の際、一夜の思出を物すること

佐々木秀一博士の追憶

佐々木家の一族は分れて三軒となる。佐々木東洋先生（政典博士の父）の後をつた。本家本元の千佳佐々木東洋の後を東洋先生がつぎ、本所四ツ目佐々木東洋先生がつぎ、神田駿河臺佐々木東洋先生の後を、政吉先生がつがれた。而して政吉先生の後に隆興博士が養嗣子として入られ、東洋先生の後に秀一博士が養嗣として入られた。秀一博士は幼少の頃より駿河臺の佐々木家へ出入せられ、興堂先生に關する追憶は、筆にしても口にしても盡ぬものがあるであらう。因て私は多忙なる秀一博士をして、今嘆息の際、一夜の思出を物すること

卷之三

一、政吉先生が五個年は歐洲留學から歸朝されて間もなく駿河臺の本宅に於て祝宴が催された席上で、病院の事務長川村恒次郎氏が「頗るదるま」を踊ったものであります。其の頃の記憶は漠然としてゐるが後年この川村氏、娘を再三見たので記憶が蘇がへてゐます。その頃、先生は、早朝起きぬに浴衣を羽織つて浴場に歩かれた。そこには四角形の比較的丈の高い風呂箱に水で二、三張つてあって、ザブ／＼水浴を行はれた。毛アラシに紙をついたものや、大形のタオルなども當時（明治十八年）既に用ひられてゐた。川村富次郎君（後年の平塚分院院長）にも是非水浴をしようと云はれたが、中川君は一回やつて貰邪をひきヨリ／＼だと云つたことを記憶してゐる。當時、第一高等學校の校長（失名）から依頼されて、冷水浴及び海水療法の奨勵に就て講演されたが（之には後日になつて知つた）恐心、我が國に於て始めて事であつたをせう。

政吉先生が諭すと云はれた。先生は
念入りに幾度となく打診をされ聽診をさ
れた。私は多くの医者の治療ぶりをみて
ゐたが、夫れとはどことなく違ふので、
其時の印象が今でもアリ／＼とみえるや
うであります。

三、この後半、父東海から聞いた話であるが、加藤某患者に對診を乞ふた際、先生は腹を診診して肝臓のアセスメントだされながら、瀕死の患者を前にして抱から用意の注射針を取出し、穿刺を行つて體液を證明し、大いに驚いて「診断が判明してよかつた」と喜べる喜びを述べられたのである。當時、胃病院には出来ないことを、最も難なさざらに行へる所が偉いばかりでなく、先生の面目をよく表現してゐると思ひます。

性下痢症を発し、小池重君が來院、救急注射をされ、星子四郎君が當時恐れられたるコレラを疑はれて、駒込病院の中川頼助君に嘱して検診の結果、夫は否定されたが、次いでイレウスを起し、吉光寺錦君は急遽手術を必要とされた。そこで佐藤三吉、河藤文繁、田代義徳の三先生に電話をしたが、「いずれもお留守と云ふ」とこちらに政吉先生が来診された。その時の第一言は「外科婦に廻はす前に内科醫者のすべき事をしなければならない」といふのであつたとの事である。さうして高位溝脇によりボコツと強痛が治つたと患者は六にてぬました。

王先生は大學教授時代に、明治二十四年四月、當時世界を騒動させたるコツホ氏發見のツベルクリン療法研究の爲め獨逸に出版を命ぜられ、翌二十五年六月歸朝後、自宅内に研究所を創立して大に

以上は私の帝大在學中の諸先生、諸先輩並に知人同僚より得たる話柄を羅列し、それに私の想ひいづるよ

まと。そこはかとなく書き加へたるものである。追憶すれば尚ほ幾多の材料はあるど、紙數に限りあるを以て。それは後の機會に譲ることとする。私は偶然にも中學以來隆興博士と同窓ならし故を以て、海山にも筆しき高恩深澤に浴したるを追憶して轉々感謝の念に堪へぬ。今在天の靈に對し恭しく謝恩の情を陳じ冥福を祈りつゝ茲に筆を擱くものである。

(昭和一四・二・初)

まを、そこはかとなく書き加へたる
ものである。追憶すれば尚ほ幾多の
材料はあるが、紙數に限りあるを以
て、それは後の機会に譲ることとする。
私は偶然にも中學以來隆興博士
と同窓なりし故を以て、海山にも等
しき高恩深澤に浴したるを追憶して
轉々に感謝の念に堪へぬ。今在天の靈
に對し恭しく謝恩の情を陳じ冥福を
祈りつゝ茲に筆を擱くものである。